

令和6年度

# 研究紀要

～ふきのとう～

児童生徒が主体的に学び、  
その学びを実感する授業づくり

秋田県立比内支援学校たかのす校

# 目 次

はじめに

I 全校研究について . . . . . 1

II 学部研究について

・ 小学部 . . . . . 1 7

・ 中学部 . . . . . 3 8

・ 高等部 . . . . . 6 4

研究同人

# 全校研究について

## 1 研究主題

児童生徒が主体的に学び、その学びを実感する授業づくり（2年／2か年）

## 2 研究主題の設定理由

### （1）過年度の研究より

令和5年度は、研究主題「児童生徒が主体的に学び、その学びを実感する授業づくり」の基、教科を対象（小学部：算数科、中学部・高等部：国語科）として授業実践を通して研究を推進してきており、その成果と課題は以下のとおりである。

#### 【成果】

- ・児童生徒の「主体的に学ぶ姿」「学びを実感する姿」を具体化した上で、単元題材の目標や内容などについて検討を重ねながら単元題材づくりができた。
- ・抽出児童生徒の変容を見取り、その変容を基に単元題材や授業の改善を図ることができた。
- ・ICTの活用について職員研修や実践などを実施し、授業におけるICT活用方法の検討、改善をすることができた。

#### 【課題】

- ・単元題材づくりや授業づくりを重ねてきたものの、児童生徒の「学びの実感」を十分に高めることができなかった。児童生徒が自身の学びに気づき、学んだことを自分なりの方法で表現したり活用したりする姿を目指し、他の学習活動との関連をふまえた年間を見通した単元題材づくりが必要であった。
- ・単元題材の目標や内容に関する検討の際、目標や内容が過多になったり、曖昧な部分があったりしたため、目標や扱う内容について十分な吟味が必要であった。
- ・ICT活用の実践や研修を充実させ、日々の授業に生かしていく必要がある。

### （2）学校の現状と児童生徒の実態より

本校は、北秋田市に昭和52年に開校し、大野岱吉野学園や陽清学園等の施設に隣接している。児童生徒総数は43名（小学部12名、中学部12名、高等部19名）である。本校は知的障害のある児童生徒を対象としているが、発達障害の状態像を示す児童生徒や肢体不自由のある児童生徒、医療的ケアを要する児童生徒なども在籍しており、障害の重度、重複、多様化が顕著である。

本校の教育目標は「自立と社会参加」であり、その達成に向けて様々な学習活動を展開してきている。これまでの取組から、児童生徒には主体性や意欲が育ってきており、様々な力を身に付けてきているが、学んだことの十分な定着、及び児童生徒自身が学びに気づき活用していく取組の充実が課題として挙げられる。

### （3）学校経営方針より

- ・日々の授業評価と改善を重ねることで、教師の指導力及び専門性の向上を図る。
- ・体験的、実地的な学習を創意・工夫し、常にチャレンジある学習活動を展開する。
- ・学習指導要領の基本的な考え方を踏まえ、「主体的・対話的で深い学び」の視点と、ICT機器の効果的な活用等により、授業の質を高め、時代に求められる児童生徒の資質・能力を育成する。

## 3 研究の目的

- ・教科に焦点を当て、単元や授業の目標と評価を明確にし、他の学習活動との効果的な関連を図りながら単元題材づくりを積み重ね、児童生徒の主体的な学びや学びの実感につなげる。
- ・授業改善を積み重ねる中で、児童生徒が主体的に学んだり、その学びを実感したりするための学習活動や手立ての在り方、ICTの効果的な活用方法を明らかにする。

## 4 研究仮説

児童生徒一人一人が主体的に学習活動に取り組む姿や、学んだことに気付いて他の場面で自分なりの方法で生かそうとする姿を目指し、目標や評価を明確にした単元づくり、及び授業改善を積み重ねていく。これらの実践を積み重ねることで、単元や授業の質が向上し、児童生徒の資質・能力を育てることにつながるだろう。

## 5 研究内容・方法

### (1) 児童生徒が学びを実感できる単元づくり

- ①児童生徒の丁寧な実態把握
  - ・学習指導要領に基づいた、複数の教師による実態把握と共有
  - ・児童生徒の実態の定期的な見直し
- ②児童生徒が学びを生かすことができる単元題材の立案
  - ・年間を見通せる単元題材一覧表の作成
  - ・対象教科と他の学習活動との効果的な関連の検討と改善
- ③単元題材の検討と改善の充実
  - ・単元題材の目標と内容の明確化と精選
  - ・授業で取り上げる題材や教材の検討、改善
  - ・単元題材の改善の過程の可視化と共有

### (2) 児童生徒が主体的に学び、その学びを実感できる手立ての検討と実践

- ①学びの実感に関する要点を絞った一単位時間の授業づくり
  - ・学びへの気付きや実感につながる要点の検討
  - ・要点に沿った授業改善の積み重ねと、有効な方法や手立ての具体化
  - ・要点に沿って、他の学習グループの授業について知る・考える会の設定
- ②研究授業と授業研究会の実施
  - ・各学部の事前授業研究会、全校授業研究会の実施
- ③ICTの効果的な活用と改善
  - ・研究対象となる教科における、ICT活用の継続的な実施と改善

### (3) 実践を下支えする研修会の実施

- ①全校研究会の実施（全3回）
- ②研究日の実施（月1回程度）
- ③授業づくりの情報交換、共有の機会の設定
  - ・全校で、授業づくりに関する情報（教材、板書など）を共有する機会の設定
- ④ICT活用に向けた研修会の定期的な実施
  - ・ICT推進リーダーと連携した全体研修会の実施（年2回程度）
  - ・学部ごとに、児童生徒の実態やねらいに即したミニICT研修の実施（月1回程度）
  - ・ICT活用の一人一実践と、紹介し合う機会の設定

## 6 研究計画

月	全校研究会	研究日 ICTミニ研修	単元題材検討会	ICT全体研修 教材展示会	全校 授業研究会	その他
4	19日(金) <u>全校研究について</u> ・研究の概要、方向性の提案	23日(火)	30日(火) <u>絆プロジェクトの検討①</u> ・単元題材一覧表の作成			
5	7日(火) <u>学部研究について</u> ・学部研究重点の周知	10日(金)	21日(火) <u>対象教科の単元題材検討①</u> ・対象教科の年間指導計画の検討と共有			10日(金) 県特研 理事会①
6		14日(金)				20日(木) 研究主任 連絡協議会
7		8日(月)	25日(木) <u>対象教科の単元題材検討②</u> ・対象教科の年間指導計画の評価と改善	ICT 全体研修会① 教材展示会①		10日(水) 指導主事 計画訪問
8		19日(月)				
9		9日(月)	24日(火) <u>絆プロジェクトの検討②</u> ・単元題材一覧表の修正			
10		15日(火)	25日(金) <u>対象教科の単元題材検討③</u> ・対象教科の年間指導計画の評価と改善		3日(木) 小学部 算数科 全校授業 研究会	
11		5日(火)			22日(金) 中学部 国語科 全校授業 研究会	
12		2日(月)			19日(木) 高等部 国語科 全校授業 研究会	
1		9日(木)	21日(火) <u>対象教科の単元題材検討④</u> ・対象教科の年間指導計画の評価と次年度に向けて	ICT 全体研修会②		31日(金) 県特研 理事会②
2	17日(月) <u>研究の成果と課題</u> ・研究の成果と課題の共有 ・次年度への提案		3日(月) <u>絆プロジェクトの検討③</u> ・単元題材一覧表の評価 ・次年度への提案			
3		11日(火)				

## 7 研究の実際

### (1) 児童生徒が学びを実感できる単元づくり

#### ①児童生徒の丁寧な実態把握

- ・丁寧な実態把握のために、今年度は「指導内容確認表／熊本大学教育学部附属特別支援学校（全校研究資料1）」を使用して、対象教科における実態把握を全グループで行った。実態把握をする際は、複数の教師で見取りを行い、その結果を学部職員で共有した。また、前期終了段階で実態把握の見直しを図った。

#### <成果：○ 課題：△>

- 対象教科の内容をふまえた上で、児童生徒の実態を具体的に捉えることができ、学部職員間で共有することができた。
- 対象教科の全内容を見渡しながら取り扱う内容やその時期、内容に偏りがないかなどを確認でき、年間指導計画の立案に生かすことができた。
- △年度当初や前期終了段階で実態把握の見直しを図ったものの、より細やかに実態を見直す機会の設定が必要であった。

- ・児童生徒の実態を把握した上で、学部ごとに「主体的に学ぶ姿」「学びを実感する姿」、その姿を目指して各学部で「大切にしたいこと」について検討し、まとめた（全校研究資料2）。その後、各学部の「主体的に学ぶ姿」「学びを実感する姿」「大切にしたいこと」について、学部を越えて共有を図った。

#### <成果：○ 課題：△>

- 「主体的に学ぶ姿」「学びを実感する姿」について、児童生徒の姿を具体的にイメージでき、それらの姿を目指して指導計画の立案、授業実践をすることができた。
- 指導において大切にしたいことについて学部職員が共通認識をもち、日々の授業の中で意識することができた。
- 各学部の「主体的に学ぶ姿」「学びを実感する姿」を知ることで、学部間のつながりを念頭において指導計画の立案をすることができた。

#### ②児童生徒が学びを生かすことができる単元題材の立案

- ・児童生徒が自身の学びに気付き、その学びの実感を高めていくためには、学びを他の学習場面で発揮、活用できる場面の設定が必要だと考えた。そこで、まずは年間の主な学習内容と時期を記した、単元題材一覧表（図1）を学部ごとに作成した。
- ・児童生徒の学びの実感を高めるために、4月に作成した単元題材一覧表を活用し、5月に対象教科と他の学習活動との効果的な関連を検討した。さらに、9月には単元題材について前期の評価や後期内容の再検討、2月には年間の振り返りと次年度の取組について検討した。

#### <成果：○ 課題：△>

- 単元題材一覧表の作成を通して、年間の学習のねらいや内容を段階的・計画的に設定することができた。
- 学んだことに気付き、その学びの定着や発揮ができる場面を、年度当初の段階で設定することができた。
- 単元題材一覧表を作成することを通して、教師が年間の学習全体に見通しをもち、「児童生徒の学びの実感を高めていく」という意識をもった指導計画の立案と実施につながった。
- △単元題材一覧表を用いて前期、及び後期で単元題材の検討、評価を行ってきたが、より効果的に単元題材一覧表を活用していくための方法や時期などを検討していく必要がある。

【単元題材一覧表】

縦軸に全ての教科と学習活動、横軸に時期を記し、  
表の部分に単元題材の内容を記した付箋紙を貼り付けたり、  
学習同士の関連やつながりを書き込んだりできるようにした大判の表。

年間を通してこの表を活用し、追加、修正を加えながら、単元題材の検討、改善を活用してきた。

	4月	5月	6月	7月	8月	・・・
全校行事	入学式	運動会	餅っこまつり	わくわく集会		
学部の中心となる学習活動「絆プロジェクト」				夏まつり		
学部行事	新入生歓迎会			学校間交流		
研究対象教科	平仮名の読み書き 様子を表す言葉		文づくり	発表しよう		関連する学習を矢印でつなげる
生単	歓迎会準備		やってみよう 〇〇①			
以下、全ての教科、学習を記す					中心となる学習だけでなく、様々な教科や学習との関連を図る	

4月	5月	9月	2月
①年間の行事や学部行事などを記す。 ②学級、学習グループの年間の主な単元題材を記す。 付箋紙に単元題材の内容を記して貼り付け、共有	③研究対象教科と他の学習活動との関連付けを図る。  単元題材同士を矢印でつなぐ、関連のさせ方を書き込むなどして共有	④前期の取組を振り返り、後期の単元題材を再検討する。  学部職員で検討し、付箋紙の追加、書き込みをして共有	④年間の取組を振り返り、次年度の単元題材を検討する。  学部職員で検討し、付箋紙の追加、書き込みをして次年度へ引継

【図1：単元題材一覧表の例と作成、活用の流れ】

③単元題材の検討と改善の充実

- ・昨年度の課題として、単元題材の検討、改善の充実が挙がっていたため、今年度は単元題材の検討機会を増やすこととした。各学部で行う研究日の中で、全校授業研究会で授業提示するグループを取り上げ、年度当初から単元題材の検討と改善を重ねた。

<成果：○ 課題：△>

- 単元題材検討を計画的に進めることができた。
- 定期的に単元題材検討の機会を設けたことで、その都度児童生徒の様子をふまえながら改善を積み重ねることができた。
- 年度当初から学部職員全員で単元題材検討に取り組んだことで、様々な意見を取り入れることができ、単元題材検討、改善が充実した。

- ・単元題材検討の際に単元題材構想シート（図2）を用い、目標や内容、指導計画などを整理してまとめた。

<成果：○ 課題：△>

- 単元題材の目標や扱う内容、指導計画が明確となった。また、検討、改善した内容を整理したことで、指導に携わらない職員も含め単元題材の改善の流れを共通理解することができた。
- 単元題材について検討したい事項を絞ったことで、課題の列挙で終わらず、具体的にどう改善するかまでまとめることができた。
- △単元題材構想シートを日常的に活用していくために、その様式や活用方法を改善していく必要がある。

単元題材の目標や扱う内容が学習指導要領のどの部分に該当するのかを明記する。

単元題材において  
目指す児童生徒の姿を明記する。

令和5年度 単元題材構想シート

科 \_\_\_\_\_ 部 \_\_\_\_\_

**【実態】**

**【学習指導要領における  
目標・内容】**

※ 学習指導要領から該当する部分を  
抜きたす。

**【単元題材名】**

**【単元題材の目標】**

(知・技)

(思判表)

**指導計画**

期間	主な目標	主な内容	関連する学習

この単元題材において目指す  
児童生徒の主体的な姿、学びを実感する具体的な

—主体的な学び、学びの実感につなげるために—

**単元題材（扱う題材、構成等）**

**導入・展開・まとめ場面の在り方**

**働き掛け、発問の工夫等**

これまでの単元題材の目標、内容の積み重ねが分かるように、指導計画を記す。

研究の重点でもある「学びの実感」を目指すために、具体的な手立てや工夫を意識できるように記す。

この単元題材構想シートは検討、改善を充実させるためのものであり、このシートを完成させることだけが目的とならないよう留意して使用した。

【図2：単元題材構想シートの様式】

## (2) 児童生徒が主体的に学び、その学びを実感できる手立ての検討と実践

### ① 学びの実感に関する要点を絞った一単位時間の授業づくり

- ・昨年度の授業づくりの課題として、課題に対する具体的な改善案の立案に至らなかった点が挙げられた。そこで今年度は「学びの実感」につながる具体的な授業づくりができるよう、学部ごとに授業づくりの要点を挙げ、その要点に絞った授業改善に取り組んだ(図3)。

#### <成果：○ 課題：△>

○授業づくりの要点を絞ることで、検討の際に課題の列挙のみで終わらずに、具体的にどう改善するかまで話し合うことができた。

△各グループの授業について「現段階の取組を知る→改善案を考える→実践する」ところまではできたが、その後の「改善案の実践を受けて、さらなる改善を図る」というところまで達することができなかった。授業改善を単発で終わらせず、積み重ねていくための工夫が必要である。

小学部 (算数科)	中学部 (国語科)	高等部 (国語科)
<ul style="list-style-type: none"> <li>・めあてと振り返り</li> <li>・ICTの効果的な活用</li> <li>・教材の工夫</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・めあてとまとめ、振り返り</li> <li>・扱う題材の選択</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・めあてと振り返り</li> <li>・扱う題材の選択</li> </ul>

【図3：各学部の授業づくりの要点】

※具体的な改善事項については、各学部研究資料で述べる

- ・上記の要点に沿った授業改善を進めていくためには、学部内で各グループの取組を知った上で具体的な方法や手立てを考えていく必要があると考え、対象教科の授業を見合う・知る機会を実施した(図4)。

#### <成果：○ 課題：△>

○学部内で、対象教科の全グループの取組を共有することができた。

○全グループについて取り上げたことで、指導に携わらない職員を含めた全ての職員で、学習過程や手立てについて考えたり意見交換したりすることができた。

△授業づくりをより充実できるように、授業を見合う・知る機会の実施時期や回数の検討が必要である。



対象教科の全グループの振り返りの場面の動画を見合い、情報交換をした。普段は他のグループの授業について知る機会が少ないため、互いに知るよい機会となった。

全グループの振り返りを見合う中で、  
・児童が「分かる」評価方法  
・評価のタイミング  
・ICTの活用  
 などが話題となった。

【図4：授業を見合う・知る機会 (小学部)】

### ② 研究授業と授業研究会の実施

- ・全校授業研究会に向けて、事前授業研究会を実施した。どの学部も全校授業研究会の1か月ほど前に事前授業研究会を実施し、その協議で得た成果と課題を整理し、授業改善につなげている。
- ・10月に第1回全校授業研究会(小学部算数科)、11月に第2回全校授業研究会(中学部国語科)、12月に第3回全校授業研究会(高等部国語科)を実施した。後日、グループ協議の意見が書かれた模造紙を再度じっくりと見合う機会を設定し、全校授業研究会における成果と課題を全職員で共有した。

#### <成果：○ 課題：△>

○各学部で事前授業研究会を実施したことで、授業の課題を焦点化でき、学部職員全員で意見を出し

合いながら授業改善をすることができた。

○全校授業研究会で得た成果と課題（図5）について、当日の事後研究会の中だけでなく後日改めて確認、整理したことで、成果と課題についてそれぞれの学部で再度捉え直し、さらなる授業改善につなげることができた。

△全校授業研究会終了後の授業について、改善した部分などを共有する機会の設定が必要であった。

	<b>第1回 全校授業研究会</b> 小学部Aグループ 算数科 「さんすうダンジョン②～ながさくらべをしよう～」	
	「長さ」を題材とした授業を実施。 オリジナルの測定器「ぴたっとくん」を用いて具体物の長さを比較し、「長い」「短い」を判断することをねらいとした。	
主な成果	主な課題	
学習への意欲を高める、興味を生かした単元設定	これまでの学習の過程が見える工夫	
見方・考え方を身に付ける教材の使用	めあてに対する振り返りの在り方 (個々の目標に対する振り返りとグループの振り返り)	
児童自身が気付けるような、見方・考え方の言語化	「長さ」(※小学部が授業で取り上げた学習内容)を多様な視点で捉えた学習活動の設定	
	板書の活用	
	めあての言葉のおさえの場面	
	I C Tとアナログ教材のバランス	

	<b>第2回 全校授業研究会</b> 中学部Aグループ 国語科 「理由マスターになろう！～相手に理由を伝えるためには？～」	
	理由を表す文づくりの授業を実施。 気持ちとその理由を考え、理由を表す言葉「なぜなら・・・」「～からです」を用いた文をつくって伝えることをねらいとした。	
主な成果	主な課題	
ねらいを焦点化し、学習を段階的に積み重ねながら期待感をもたせる単元設定	自立活動の視点を含めた単元、授業づくり	
生徒の発言を促す働き掛け (ペア学習の設定、T Tの役割分担、教師の姿勢など)	題材として扱う言葉の必要性や活用場面などを吟味した発展性のある単元題材構成	
意図的なI C Tとアナログ教材の使い分け	生徒の気持ちや考え、発言を十分に引き出し、広げる・深めるための課題設定と働き掛け	
	学びの気付き・実感につながる、まとめの工夫や評価の充実	



### 第3回 全校授業研究会

高等部Aグループ 国語科

「豊かな表現で伝えよう～続・文章で伝えよう～」

お題である「オレンジジュース」の宣伝文を考える授業を実施。これまで学習してきた事柄をふまえ、想定した相手に伝わる言葉や表現を考えて書き表すことをねらいとした。

主な成果	主な課題
これまでの学習内容を生かし、前時の学習とつながる学習活動の設定	考えた文章が相手に伝わったという実感ができる評価の工夫
生徒が考える時間の十分な確保	国語科として、ねらいたい言葉、表現の明確化
T Tの役割分担	生徒の学び、気づき、考えをより広げるまとめの工夫
授業の要点を示した、整理された板書	語彙を広げるための参考となる資料や教材の提示

【図5：全校授業研究会の成果と課題（抜粋）】

### ③ ICTの効果的な活用と改善

- ・対象教科におけるICTの効果的な活用方法について検討した。ICTを使うこと自体が目的とならないように、ねらいや活用方法、場面などを明確にした。活用した結果をふまえ、さらに効果的な方法が他にないか十分に考え、活用方法の改善を図った。

#### <成果：○ 課題：△>

- ICTをむやみに活用するのではなく、何のために、いつ、どのように活用するのかを明確にできた。
- ICTを活用した際のデメリットにも目を向け、本当に「効果的な」活用となっているかを確認しながら、その活用方法を考えることができた。
- △様々な授業におけるICTの活用方法についても、常に「効果的な活用となっているか」という視点をもって検討、改善をしていくことが必要である。

### (3) 実践を下支えする研修会の実施

#### ①全校研究会の実施（全3回）

- ・4月に全校研究の概要を、5月に学部研究の内容・重点などを全職員に周知し、方向性を確認した。その際、職員から意見をもらい、研究方法、内容を修正した。2月には、今年度の研究の成果と課題について全職員で共有し、次年度の研究について意見交換をした。

#### <成果：○ 課題：△>

- 研究の方向性や成果と課題などについて、全職員で共通理解を図りながら進めることができた。
- △様々な意見を取り入れながら研究を充実させていくために、適宜職員の意見交換の場を設定する必要がある。

#### ②研究日の実施（月1回程度）

- ・月1回、学部ごとに研究日を実施し、授業づくりを進めたり、他学部の研究内容や全校授業研究会の成果と課題などについて共有を図ったりした。

#### <成果：○ 課題：△>

- 研究や授業づくりについて、職員が意見を出し合う様子が多く見られた。
- 他学部の研究内容や全校授業研究会の成果と課題について知り、そこで話題となったことを学部研究や授業づくりに具体的に取り入れることができた。
- △学部ごとに話し合う機会が多かったため、学部を越えて話し合う機会もあるとよい。

### ③授業づくりの情報交換、共有の機会の設定

- ・7月に、全職員で国語科、算数科の教材を持ち寄って教材展示会を実施した（図6）。

#### <成果：○ 課題：△>

- 教材を見合うことで、他グループの授業について知ることができた。教材を手にとったり質問したりなど、積極的に授業について知ろうとする様子が見られた。
- 教材から得たことを、各々の授業づくりの参考にすることができた。
- △年に1回ではなく、回数を増やせるとよい。



【図6：教材展示会の様子】

### ④ICT活用に向けた研修会の定期的な実施

- ・ICT推進リーダーと連携しながら、夏季休業中、10月、冬季休業中にICT全体研修会を実施した（図7）。研修会では、授業における活用頻度の高いアプリ「ロイロノート」や、今後活用が予想されるアプリ「Canva」について取り上げた。
- ・研究日と合わせる形で、学部ごとにICTミニ研修を実施した。学部の児童生徒の実態に即した内容（電子黒板、実物投影機、タブレットなど）を取り上げて実施した。

#### <成果：○ 課題：△>

- 各アプリの特徴を知り、基本的な操作や発展的な活用方法について、実際に操作しながら学ぶことができた。
- △有意義な研修とするためには、限られた時間の中で、より授業づくりに役立つような実践的な内容を工夫して取り上げる必要がある。また、実際に授業内で活用した例など、具体的な事例も紹介し合えるとよい。



【図7：ICT全体研修会の様子】

- ・7月～9月でICT活用の一人一実践に取り組んだ。教科等は問わず、簡単なものでよいので実践し、活用のねらいや実際の様子をICT実践シートにまとめ、10月に紹介し合う機会を実施した。（図8、9）

#### <成果：○ 課題：△>

- 一人一実践に取り組み、実践を紹介し合うことで、職員のICT活用への意欲が高まったり、活用の幅が広がったりした。
- △この期間の実践に限らず、校内のICT活用の事例をより手軽に知れるような情報共有や研修の在り方を工夫していく必要がある。



【図8：ICT実践を共有する会の様子】

単に「ICTを使う」とならないように、活用のねらいを記した。

活用した成果と課題を具体的に記した。

1人1枚作成したこのシートを全職員分まとめて配付した。共有する会では、このシートを基に縦割りグループで実践を紹介し合った。

授業者	学習グループ 学習名	日時
	ICT活用のねらい 好きな本を読むことを余暇にも生かす	9月19日 使用した機器、アプリ等 タブレット(ポイスメモ)
実践の様子		
※ 児童生徒の学習の様子や機器の写真(機器のみでもOK)を1、2枚程度載せる。		
【活用方法】 本の読み聞かせて、繰り返し読んだ本はページをめくるタイミングが分かって自分でめくっていたため、余暇につなげたいと考えた。ポイスメモに教師の読み聞かせを数冊分録音し、夏休みの宿題にした。		
【成果】 一人で楽しみながら一定時間、本を読んで過ごすことができた。ページをめくるタイミングが分かって楽しめる本が増えた。		
【課題】 録音の声に聞き入ってしまい、ページと合わなくなり分からなくなってしまうことがあった。再生したい本の選択や、音声開始ボタンは周りのサポートが必要である。		
【今後やってみたいこと】※今回の実践以外のことでもOK		
本のページを写真にとり、ポイスメモの再生に合わせて画面をスライドしていくことで、タブレットひとつで楽しむこともできそうである。ただ、本に触れることも大事にしていきたい。		

【図9：ICT実践シート例】

## 8 成果と課題

### 成 果

#### (1) 児童生徒が学びを実感できる単元づくり

##### ・対象教科の目標、内容をふまえた児童生徒の実態把握

対象教科の学習指導要領の内容をふまえた上で、丁寧に児童生徒の実態を把握して職員間で共有することができた。また、対象教科の全内容を見渡し、扱う内容や時期、バランスなどを考慮でき、年間指導計画の立案に役立てることができた。

##### ・児童生徒が学びを実感し、生かすことができる単元題材の立案

単元題材一覧表を活用し、児童生徒が学んだことに気づき、その学びの定着や発揮ができるような単元題材を設定することができた。また、教師が「児童生徒の学びの実感を高めていく」という意識をもった指導計画の立案と実施につながった。

##### ・単元検討、改善の充実

単元題材の目標や扱う内容、指導計画を明確にし、単元題材の検討事項を絞ったことで課題の列挙で終わらず、具体的な改善を図ることができた。

#### (2) 児童生徒が主体的に学び、その学びを実感できる手立ての検討と実践

##### ・「学びの実感」に関する要点を絞った授業づくり

学部ごとに授業づくりの要点を挙げて授業改善に取り組んだことで、具体的な改善案を多く出すことができた。また、対象教科全グループの授業について情報・意見交換をしたことで、指導に携わる職員だけでなく全ての職員が自己の授業の学習過程や手立てについて考えることにつながった。

##### ・授業研究会の成果と課題をふまえた授業改善

事前授業研究会、全校授業研究会で得た成果と課題を整理し、課題を焦点化して話し合ったことで、具体的な授業改善につなげることができた。

##### ・ICTの効果的な活用と改善

ICTをむやみに活用するのではなく、何のために、いつ、どのように活用するのかを明確にできた。さらに、ICTを活用した際のデメリットにも目を向け、本当に「効果的な」活用となっているかを考えることができた。

#### (3) 実践を下支えする研修会の実施

##### ・研究日の活用

月1回、学部ごとに研究日を実施して授業づくりを進めた。他学部の研究内容や全校授業研究会の成果と課題などの共有を十分に図り、授業改善につなげた。

##### ・授業づくりに関する情報共有

全職員で国語科・算数科の教材を持ち寄って教材展示会を実施し、教材を手にとったり質問したりなど、積極的に授業について知ろうとする様子が見られた。教材から得たアイデアを、自己の授業に生かそうとする様子も見られた。

##### ・ICT活用に向けた研修会の実施

全体研修会、学部ごとのミニ研修会を実施し、児童生徒の実態に即した内容を取り上げながらICT活用について学び、職員のスキルを向上させることができた。また、ICTの一人一実践にも取り組み、様々な活用方法を共有することができた。

## 課題

### (1) 児童生徒が学びを実感できる単元づくり

#### ・ 定期的な実態把握

年度当初や前期終了段階で実態把握の見直しを図ったものの、より細やかに実態を見直す機会が必要である。

#### ・ 児童生徒が自ら学び、気付きや学びを広げていく単元題材の工夫

児童生徒が自ら学び、学びを積み重ねていくために、単元題材立案の段階から自立活動の視点を十分にふまえることが必要である。また、児童生徒自身の気付きや考え、学びをさらに広げていくために、教師が単元題材研究を深め、扱う内容、配列、教材、発問などを工夫していく必要がある。

#### ・ 単元題材一覧表、単元構想シートなどのツールを効果的に活用した単元題材の改善

単元題材一覧表や単元題材構想シートなどを用いて単元題材の検討、改善を行ってきたが、それらのツールをより効果的に活用して単元題材の改善を充実させていく必要がある。

### (2) 児童生徒が主体的に学び、その学びを実感できる手立ての検討と実践

#### ・ 授業づくりの積み重ねと充実

授業づくりについて「授業の検討・改善→実践→成果と課題の整理」の流れで取り組めたが、その後に「改善案の実践→成果と課題の整理→さらなる改善」という積み重ねをしていくことが必要である。また、授業づくりの手掛かりとなるよう、授業動画や教材を見合うなどの実践的な情報共有の工夫を増やしていく必要である。

#### ・ ICTが「効果的」かどうかの丁寧な検討と活用方法の改善

様々な授業におけるICTの活用方法について、常に「効果的な活用となっているか」という視点をもって検討、改善をしていくことが必要である。

### (3) 実践を下支えする研修会の実施

#### ・ 研究に関する意見交換の機会の充実

様々な意見を取り入れながら研究を充実させながら進めていくために、学部を越えて職員が意見交換をする場を適宜設定する必要がある。

#### ・ 日々の授業づくりに生かせる研修の設定

職員が授業づくりに生かせる有意義な研修を行うために、実践的な内容を限られた時間の中で工夫して取り上げていく必要がある。また、授業づくりに関する様々な情報を手軽に知れるような工夫も検討していく必要がある。

小学部

# 小学部の研究について

## 1 研究主題

児童が主体的に学び、その学びを実感する授業づくり（2年／2か年）

## 2 学部研究の重点

- ・実態に応じて単元目標・内容を明確化、焦点化し、身に付けた見方・考え方を人とのやりとりの中で発揮し評価される場面を他の学習活動で設定することで、学びを実感できる単元づくりを行う。
- ・身に付けてほしい見方・考え方に気付く過程をつくり、そこで思考・判断・表現したことを評価し、その積み重ねを自ら確認できる学習内容や教具の工夫、ICT活用方法を検討することを通して、学びを実感できる授業づくりを行う。

## 3 重点の設定理由

算数科は、「同じ大きさの物や長い方を選んだ」といった目に見える形で児童が見方（大きさや長さ）・考え方（ぴったり重なっているから同じ大きさ、ぴたっとしている方が長い）を働かせたかどうかの評価しやすく、その様子や変容を基に授業改善を積み重ねていく中で本主題にせまることができる。また、昨年度は、お金に関する学習を行い、身に付けた見方・考え方を発揮する場面が「修学旅行の買い物の場面」と明確だったが、買い物以外の生活場面で、算数科で身に付けた見方・考え方を発揮する場面を十分に設定できなかったという課題があった。また、児童が学びを実感するためには、様々な人とのやりとりの中で、できたことを認めてもらう経験を積む必要があると考える。そのため、算数科で身に付けた見方・考え方を、人とのやりとりの中で発揮する場面を検討するために、昨年度に引き続き算数科を研究対象とした。

昨年度の課題として、年度始めに担任など一部の教師で児童の実態把握を行い、十分な実態把握ができないまま単元設定を行ったことが挙げられていた。そのため、今年度は、学習指導要領の目標及び内容を基に、学部全員で実態把握を行い、実態に応じた適切な単元目標の設定、単元計画の立案を行っていくこととした。

児童が主体的に学ぶためには、教師が課題解決のために必要な見方・考え方を直接教えるのではなく、児童が自ら気付く過程をつくる必要があると考えた。例えば、「どちらが長いのか？」「どうやったら正しく比べられるのか？」といった課題に向き合う中で、「近付ければいいのかな？」「端を揃えればいいのかな？」といった思考をし、「ぴたっと付いている方が長い」「隙間がある方が短い」といった判断と表現をする。そうした課題に向き合う中で、思考・判断・表現したことを評価し、その積み重ねを自ら確認できる学習内容や教具の工夫、ICT活用方法を検討する。そうした過程によって主体的に身に付けた見方・考え方であれば、他の学習場面における同様の課題でも、自ら身に付けた見方・考え方を発揮していくことができ、人とのやりとりの中で評価を積み重ねていくことで学びを実感できるのではないかと考え、学部研究の重点を設定した。

## 4 研究仮説

算数科を対象教科とし、単元づくりでは、実態に応じた単元目標・内容を明確化、焦点化し、身に付けた数学的な見方・考え方を人とのやりとりの中で発揮する場面を設定する。また、授業づくりでは、身に付けてほしい数学的な見方・考え方に気付く過程をつくり、そこで思考・判断・表現したことを評価し、その積み重ねを自ら確認できる学習内容や教具の工夫、ICT活用方法を検討する。これらの実践により、児童が主体的に学習活動に取り組み、学びを実感し身に付けた数学的な見方・考え方を人とのやりとりの中で発揮していくことができるだろう。

## 5 研究内容・方法

### (1) 児童が学習を積み重ね、その学びを実感できる単元づくり

- ① 児童の丁寧な実態把握とその共有
  - ・ 学習指導要領に基づいた実態把握
  - ・ 実態の定期的な見直しと共有
  
- ② 単元題材一覧表の作成と活用
  - ・ 他の学習との効果的な関連や年間を見据えた単元題材の立案、改善
  - ・ 学んだことを人とのやりとりに生かす場面の設定
  
- ③ 単元題材の検討と改善の積み重ね
  - ・ 単元題材の目標や内容の検討と精選
  - ・ 単元題材の改善の流れ、積み重ねの見える化

### (2) 児童が主体的に学び、その学びを実感できる手立ての検討と実践

- ① 要点を絞った一単位時間の授業づくり
  - ・ 学部における授業づくりで大切にしたいポイントに焦点を当てた授業改善の積み重ね
  - ・ 他の学習グループの授業について知る・考える機会の設定
  
- ② ICT機器の活用と改善
  - ・ 活用のねらいの明確化
  - ・ 活用方法の改善の積み重ね

## 6 小学部研究計画

月	主な内容
4月	<b>【研究日】</b> ・小学部研究の方向性の確認 ・ICTミニ研修（タブレット端末基本操作） <b>【単元・題材検討日①】</b> ・わいわいプロジェクトと各教科間のつながり
5月	<b>【研究日】</b> ・ICTミニ研修（実物投影機） ・実態把握（指導内容確認表／熊本大学教育学部附属特別支援学校を基に） ・「主体的に学ぶ姿」「学びを実感する姿」の確認 ・算数科で大切にしたい点の検討 <b>【単元・題材検討日②】</b> ・算数科の年間指導計画とわいわいプロジェクト、教科間のつながり
6月	<b>【研究日】</b> ・単元づくり ・ICTミニ研修（電子黒板）
7月	<b>【研究日】</b> ・年間指導計画検討、単元検討（単元目標、単元名、単元計画） ・小単元検討（小単元検目標、小単元検名、小単元検計画） ・本時検討（本時の目標、内容、教材、ICT活用） ・ICTミニ研修（ロイロノート） <b>【単元・題材検討日③】</b> ・算数科の年間指導計画の見直し <b>【教材展示会】</b> ・国語科、算数科の教材展示会
8月	<b>【研究日】</b> ・身に付けてほしい数学的見方・考え方の確認と、手立ての検討 ・ICTミニ研修（フリーボード、各種アプリ）
9月	<b>【研究日】</b> ・事前授業研究会 ・授業を見合う会 ・ICTミニ研修（各種アプリ） <b>【単元・題材検討日④】</b> ・前期までのわいわいプロジェクト、各教科の取組の確認と共有
10月	<b>【全校授業研究会】</b> ・全校授業研究会授業提示、事後研究会 <b>【研究日】</b> ・全校授業研究会授業を終えて ・ICTミニ研修（各種アプリ）
11月	<b>【研究日】</b> ・中学部全校授業研究会の成果と課題の整理 ・全校授業研究会対象グループ以外の単元・授業づくりについて成果と課題 ・ICTミニ研修（各種アプリ）
12月	<b>【研究日】</b> ・高等部全校授業研究会の成果と課題の整理 ・学部研究の成果と課題について ・ICTミニ研修（各種アプリ）
1月	<b>【研究日】</b> ・学部研究のまとめ（成果と課題） <b>【単元・題材検討日⑤】</b> ・全校縦割グループで実施
2月	<b>【単元・題材検討日⑥】</b> ・今年度の振り返り
3月	<b>【研究日】</b> ・次年度の研究に向けて

## 7 研究の実際

### (1) 児童が学習を積み重ね、その学びを実感できる単元づくり

#### ① 児童生徒の丁寧な実態把握とその実態の共有

- ・ 学習指導要領に基づいた実態把握
- ・ 実態の定期的な見直しと共有

指導内容確認表（熊本大学教育学部附属特別支援学校）及び学習指導要領の指導目標・内容一覧表（山形県教育センター）を基に、算数科の各グループの実態把握を行った（図1）。

授業提示グループについて実態を検討 ○：大体できる 印なし：難しい

測定	授業提示グループについて実態を検討	測定	授業提示グループについて実態を検討	授業提示グループについて実態を検討
<p>身回りのもの大きさ</p> <p>知技 ①大きさを長さなどを、基準に対して同じか違いかによって区別すること。</p> <p>②ある、ない、大きい、小さい、多い、少ないなどの用語に注目して表現すること。</p> <p>③大小や多少等で区別することに關心をもち、量の大きさを表す用語に注目して表現すること。</p>	<p>二つの量の大きさ</p> <p>知技 ①長さ、重さ、高さ及び広さなどの量の大きさが分かること。</p> <p>②二つの量の大きさについて、一方を基準にして相対的に比べること。</p> <p>③長い、短い、重い、軽い、高い、低い及び広い、狭いなどの用語が分かること。</p> <p>④長さ、重さ、高さ及び広さなどの量を、一方を基準にして比べることに關心をもち、量の大きさを表す用語を用いて表現したりすること。</p>	<p>身の回りのもの量の単位と測定</p> <p>知技 ①長さ、広さ、かさなどの量を直接比べる方法について理解し、比較すること。</p> <p>②身の回りにあるものの大きさを単位として、その幾つ分かが大きさを比較すること。</p> <p>③身の回りのものの長さ、広さ及びかさについて、その単位に着目して大小を比較したり、表現したりすること。</p> <p>知技 ①日常生活の中で時刻を読むこと。</p> <p>②時間の単位（日、午前、午後、時、分）について知り、それらの関係を理解すること。</p> <p>③時刻の読み方を日常生活に生かして、時刻と生活を結び付けて表現すること。</p>	<p>身の回りのもの量の単位と測定</p> <p>知技 ①長さ、広さ、かさなどの量を直接比べる方法について理解し、比較すること。</p> <p>②身の回りにあるものの大きさを単位として、その幾つ分かが大きさを比較すること。</p> <p>③身の回りのものの長さ、広さ及びかさについて、その単位に着目して大小を比較したり、表現したりすること。</p> <p>知技 ①日常生活の中で時刻を読むこと。</p> <p>②時間の単位（日、午前、午後、時、分）について知り、それらの関係を理解すること。</p> <p>③時刻の読み方を日常生活に生かして、時刻と生活を結び付けて表現すること。</p>	<p>時刻や時間</p> <p>知技 ①日常生活の中で時刻を読むこと。</p> <p>②時間の単位（日、午前、午後、時、分）について知り、それらの関係を理解すること。</p> <p>③時刻の読み方を日常生活に生かして、時刻と生活を結び付けて表現すること。</p>
<p>データの活用</p> <p>知技 ①身近なものを目的、用途、機能に着目して分類すること。</p> <p>②身近なものの色や形、大きさ、目的及び用途等に関心を向け、共通点や相違点を考えながら、興味をもって分類すること。</p> <p>③もの同等や多少が分かること。</p> <p>④身の回りにあるものの個数に着目して、棒グラフなどに表し、多少を読み取って表現すること。</p> <p>⑤身の回りの出来事から○×を用いた簡単な表を作成すること。</p> <p>⑥簡単な表で使用する○×の記号の意味が分かること。</p> <p>⑦身の回りの出来事を捉え、○×を用いた簡単な表で表現すること。</p>	<p>身の回りのもの分類</p> <p>知技 ①身近なものを目的、用途、機能に着目して分類すること。</p> <p>②身近なものの色や形、大きさ、目的及び用途等に関心を向け、共通点や相違点を考えながら、興味をもって分類すること。</p> <p>③もの同等や多少が分かること。</p> <p>④身の回りにあるものの個数に着目して、棒グラフなどに表し、多少を読み取って表現すること。</p> <p>⑤身の回りの出来事から○×を用いた簡単な表を作成すること。</p> <p>⑥簡単な表で使用する○×の記号の意味が分かること。</p> <p>⑦身の回りの出来事を捉え、○×を用いた簡単な表で表現すること。</p>	<p>身の回りのもの量の単位と測定</p> <p>知技 ①長さ、広さ、かさなどの量を直接比べる方法について理解し、比較すること。</p> <p>②身の回りにあるものの大きさを単位として、その幾つ分かが大きさを比較すること。</p> <p>③身の回りのものの長さ、広さ及びかさについて、その単位に着目して大小を比較したり、表現したりすること。</p> <p>知技 ①日常生活の中で時刻を読むこと。</p> <p>②時間の単位（日、午前、午後、時、分）について知り、それらの関係を理解すること。</p> <p>③時刻の読み方を日常生活に生かして、時刻と生活を結び付けて表現すること。</p>	<p>身の回りのもの量の単位と測定</p> <p>知技 ①長さ、広さ、かさなどの量を直接比べる方法について理解し、比較すること。</p> <p>②身の回りにあるものの大きさを単位として、その幾つ分かが大きさを比較すること。</p> <p>③身の回りのものの長さ、広さ及びかさについて、その単位に着目して大小を比較したり、表現したりすること。</p> <p>知技 ①日常生活の中で時刻を読むこと。</p> <p>②時間の単位（日、午前、午後、時、分）について知り、それらの関係を理解すること。</p> <p>③時刻の読み方を日常生活に生かして、時刻と生活を結び付けて表現すること。</p>	<p>時刻や時間</p> <p>知技 ①日常生活の中で時刻を読むこと。</p> <p>②時間の単位（日、午前、午後、時、分）について知り、それらの関係を理解すること。</p> <p>③時刻の読み方を日常生活に生かして、時刻と生活を結び付けて表現すること。</p>
<p>数学的活動</p> <p>(7)身の回りの事象を観察したり、具体物を操作したりして、数量や形に関わる活動</p> <p>(4)日常生活の問題を取り上げたり算数の問題を具体物などを用いて解決したりして、結果を確かめる活動</p>	<p>(7)身の回りの事象を観察したり、具体物を操作したりする活動</p> <p>(4)日常生活の問題を具体物などを用いて解決したり結果を確かめたりする活動</p> <p>(7)問題解決した過程や結果を、具体物などを用いて表現する活動</p>	<p>(7)身の回りの事象を観察したり、具体物を操作したりして、算数に主体的に関わる活動</p> <p>(4)日常生活の事象から見いだした算数の問題を、具体物、絵図、式などを用いて解決し、結果を確かめる活動</p> <p>(7)問題解決した過程や結果を、具体物や絵図、式などを用いて表現し、伝え合う活動</p>	<p>(7)身の回りの事象を観察したり、具体物を操作したりして、算数に主体的に関わる活動</p> <p>(4)日常生活の事象から見いだした算数の問題を、具体物、絵図、式などを用いて解決し、結果を確かめる活動</p> <p>(7)問題解決した過程や結果を、具体物や絵図、式などを用いて表現し、伝え合う活動</p>	<p>(7)身の回りの事象を観察したり、具体物を操作したりして、算数に主体的に関わる活動</p> <p>(4)日常生活の問題を取り上げたり算数の問題を具体物などを用いて解決したりして、結果を確かめる活動</p>
1段階	2段階	3段階	3段階	3段階

小学部(算数)

【図1：指導内容確認表<一部>】

#### <成果：○ 課題：△>

○学習グループ内で共通の目標を設定する指標となった。指導内容確認表を基に実態把握を行うことで、グループの実態に応じた学習内容・計画を考えることができた。全校授業研究会対象グループでは、年度当初、時計の学習を行う予定であった。しかし、指導内容確認表を基に行った実態把握では多少や長さの概念や量感が曖昧な段階だったため、時計の学習の前に、長さや広さ、高さなどの内容を扱うこととした。また、学習指導要領を基に長さの用語や概念の確認からはじめ、直接比較、間接比較と系統的に指導計画を立てることができた。他グループについても、同様に指導内容確認表を基に実態把握を行い、単元計画の見直しを図ることができた。

- ・ 「主体的に学ぶ姿」、「学びを実感する姿」、算数科の指導において大切にしたいことの検討

小学部算数科における、「主体的に学ぶ姿」、「学びを実感する姿」を検討、整理した（全校研究資料2）。また、その姿を目指し、算数科の指導において大切にしたいことを検討し、共通理解を図った（小学部研究資料1）。

#### <成果：○ 課題：△>

- 児童の目指す姿を具体的にイメージしながら、授業づくりを進めることができた。
- 算数科で大切にしたいことを検討、共通理解したことで、学部全体で方向性をそろえて授業づくりに取り組むことができた。

#### ② 単元題材一覧表の作成と活用

- ・ 他の学習との効果的な関連や年間を見据えた単元づくり
- ・ 題材の立案、改善
- ・ 学んだことを人とのやりとりに生かす場面の設定

単元題材一覧表（図2）を活用し、算数科で身に付けた見方・考え方を発揮する場面を中心に検討した。集会や行事、生活単元学習などで、ゲームを行う際、点数係や判定係などの役割を設定し、「点数を数える」「多少や長さなどを比べる」「表やグラフで結果を表す」機会をつくり、様々な人とのやりとりの中で評価していくことを確認した。

また、収穫した農作物やイベントに向けて作った輪飾りを見て「どちらが長いですか?」「～の方が短いですね」「同じ長さで揃えよう」といった身に付けた見方・考え方を働かせる言葉掛けを意図的に日常生活の中で行っていくことも確認した。

4/30   5/21   7/26   9/24   10/28

令和6年度 小学部 単元・題材一覧表

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
全校行事	ロードレース 交通安全教室	運動会	餅つきまつり			終業式	始業式 ロードレース	若鷹祭 鈴虫音楽			役員選挙	卒業式 修了式
交流・共同				さらさら交流会①			合川小交流 合川児童会 児童会との交流	熊の動き		さらさら交流会		
合同生単	1年生を迎える会 よへまひい、あそび	よへまひい、あそび	夏祭り	お楽しみ会			遠足	ニューススポーツ②	ニューススポーツ③	クリスマス会	交流に多少や長さを取り入れたゲーム	
算数	①多少を把握して ②色 ③形	①数・数量 ②数を数える様 ③形 ④形 ⑤形										
国語	色んな名前 言葉と動き	平面名の読み書き 音読み・カタカナ 読み書き	言葉の理解 言葉と意味のつながり 文づくり	気持ちを伝える 気持ちを伝える	①測定 もの、数の大小 ②食べ物の名前							
低学年 遊び		きせつのおたぴ 遊（あそび） 泳（あそび）	遊字を遊遊した遊び 遊（あそび） 泳（あそび）									
学級生単	わくわくチャレンジ びんご	小5宿泊	わくわくチャレンジ びんご									
体育	運動会練習 身体づくり	性指図										
音楽	朝礼（年間） 鑑賞（年間）	太鼓 ダンス（年間）	小学部のもち歌 ダンス（年間）					リズムうち		合奏		
園工	ポスター制作 版画							ポスター制作 版画		クリスマス飾り 造形あそび 形、多少		鬼づくり
日生	考えたいことを伝える 活動	ポニータ										
特活	長さ・重さ ゲーム的な活動 （ボール投げ、ボール集め）											

【図2：単元題材一覧表】

<成果：○ 課題：△>

○単元題材一覧表を基に、各教科で学ぶことや発揮する場面を学部職員で共有することで、長さ比べのゲームの場面で「算数でも長い短いについて勉強しましたね」と学びをつなぐ言葉掛けをしたり、学びを発揮した姿を全員で的確に評価したりすることができた。

△研究対象グループ以外において、学習している色・形・数唱などの学びを発揮する場面の設定が不十分であった。

③単元・題材の検討と改善の積み重ね

- ・単元・題材の目標や内容の検討と精選
  - ・単元・題材の改善の流れ、積み重ねの見える化
- 単元題材構想シート（小学部研究資料2）を基に以下ア～カについて検討した。

ア 単元目標（身に付けたい見方・考え方）の確認

学習指導要領の目標を基に行った実態把握から、単分量までは扱わず、長さの用語、概念の確認、直接比較、間接比較までを扱うこととした。そのため、目標を「測る」ではなく「比べる」とし、「比べる」という言葉の定着を図るよう言葉掛けをすることを確認した（図3）。

【図3】

単元目標

- ・長さを比べる方法を知り、正確に長さを比べることができる。（知識・技能）（知識・技能）
- ・長さを正確に比べて、どれが長い、短い、同じかを理解し、伝えることができる。（思考・判断・表現力）
- ・ミッションをクリアするために、自分から長さを比べようとする。（学びに向かう力・人間性）

測るまでやる？

何をやる？決まってる？

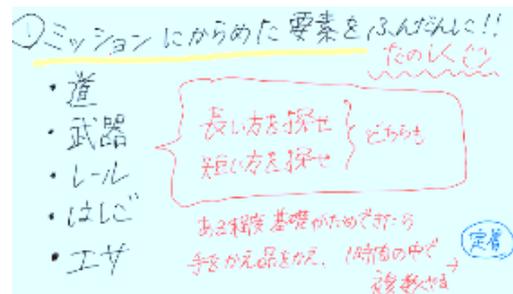
【図3：長さの単元目標】

## イ 単元のアイデア

授業提示するグループについて学部職員全員で検討した。児童が楽しんで主体的に取り組むことができ、算数科の課題に自然に向き合うことができるようなストーリー性をもたせたることとした。はじめは、すごろくを進め、「途中にかかる橋を渡るときに魚を釣ってたくさん釣れた魚はどれか比べよう」という課題を設定していた(図4)。アイデアとして、止まったマスでミッションが課され、「道、武器、レールなどの長い方を探せ!」「ミッションクリアして姫を助けだせ!」など、次に進むためにミッションをクリアする、といった必然性をもたせるようにするとよいという意見が挙がった。また、ミッションは、全員で共通のものに取り組むか、一人一人実態に応じたミッションに取り組むか、児童の学習状況に応じて検討を行った。さらに、1時間の中で複数の物を比べ定着を図るといったアイデアが出た(図5)。



【図4：単元はじめの板書例】



【図5：単元のアイデア例】

## ウ 単元名

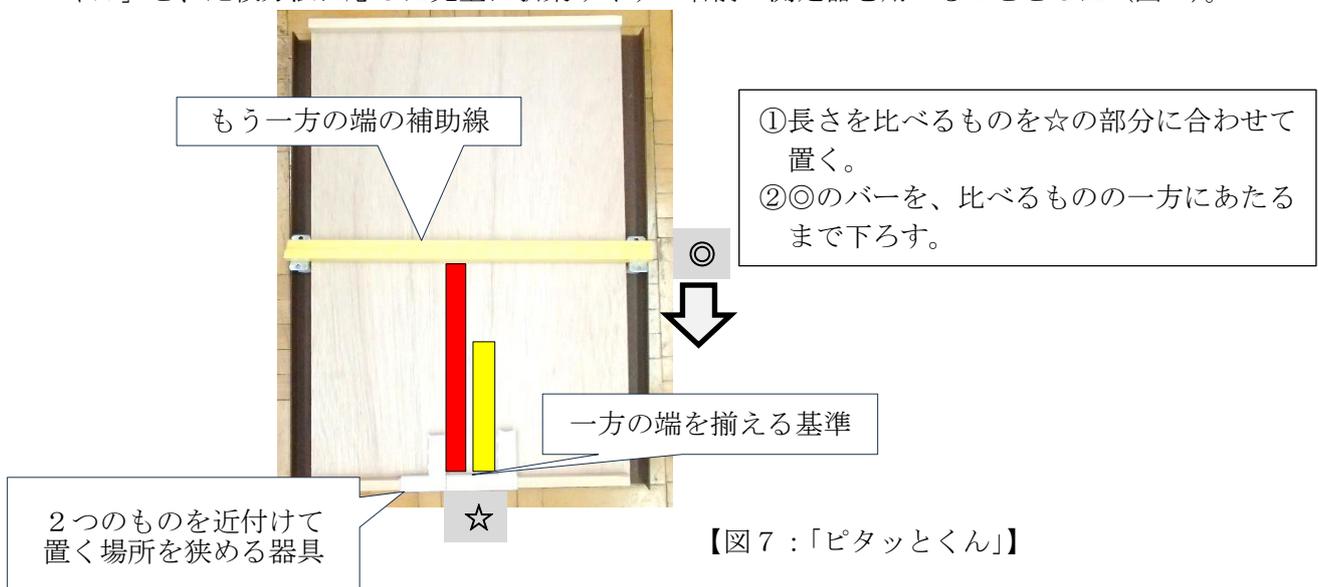
児童が楽しいと思え、身に付けたい見方・考え方が児童にとって分かるような単元名とした。「ダンジョン」は児童がゲーム好きのため興味をもって取り組むことができ、副題として「〇〇比べ」を示すことで、単元ごとに何を学ぶのか分かりやすく表すことができた(図6)。

単元名  
算数ダンジョン1～数比べ～  
算数ダンジョン2～長さ比べ～  
算数ダンジョン3～重さ比べ～

【図6：単元名のアイデア例】

## エ 教具

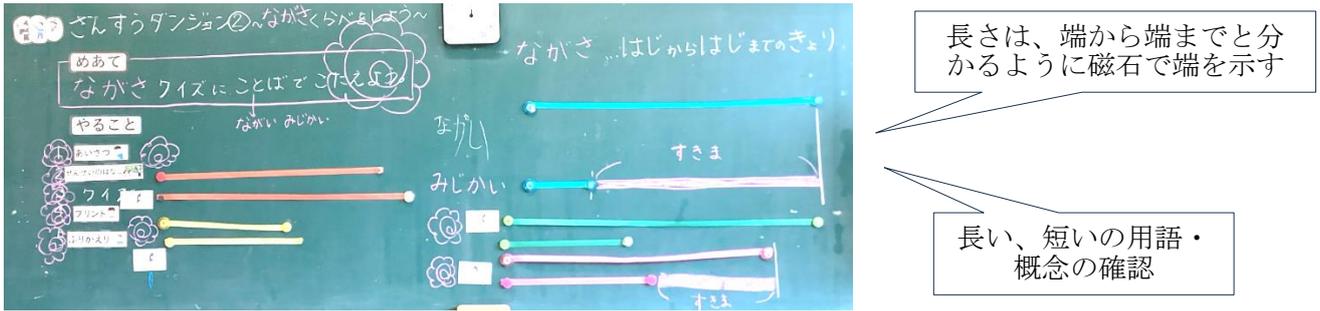
2つのものを正しく比べるためのポイント(「2つのものを近付ける」「一方の端を揃える」「もう一方の端に補助線を引き、その差を読み取る」など)を伝え、その通りにやるだけではなく、ポイントを伝えなくても自然と正しく比べることができるオリジナルの教具を作った。そして、その教具を扱う中で正しく比べるポイントを取り上げて確認することとした。さらに、ポイントが定着してきた段階で徐々に教材の補助を外しても、ポイントに気を付けることができるのか試していく、といった段階的な指導を行っていくこととした。また、直接比較は「ピタッとくん」、間接比較は「リボンちゃん」と、比較方法に応じた児童に馴染みやすい名前での測定器を用いることとした(図7)。



【図7：「ピタッとくん」】

オ 小単元計画

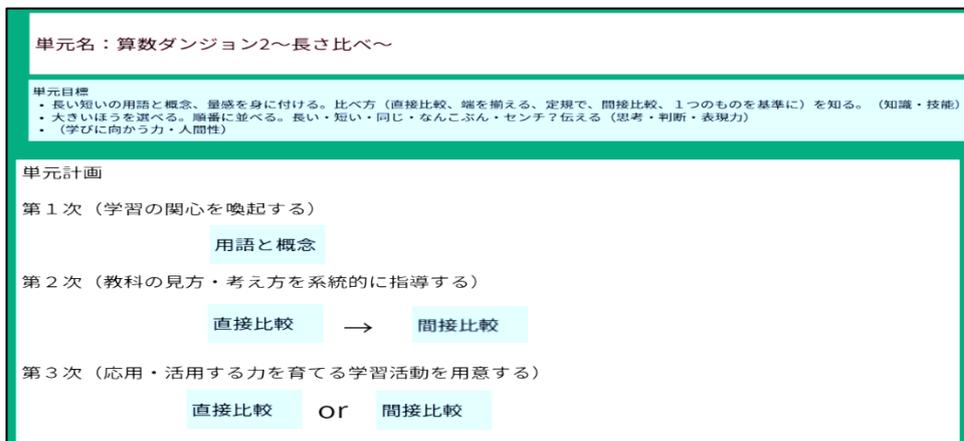
小単元の第1次では、児童の学習への関心を喚起できるように、ダンジョンのゴールを目指してミッションをクリアしていくストーリーの中で、「長い」「短い」「同じ」といった用語と概念の確認していった(図8)。



【図8：小単元第1次の板書例】

第2次では、数学的な見方・考え方を系統的に指導できるように、直接比較から間接比較へと、また、教材の補助を段階的に減らしながら段階的に指導していくこととした。

第3次では、応用・活用する力を育てる学習活動を用意することを視点に、生活への活用の仕方や、物に応じて直接比較か間接比較かどちらが適切か考えられるように指導していった。(図9、10)



【図9：小単元計画と指導内容】

時期	時数	内容						
8月	2時間	長さの概念①	長さの概念②					
9月	5時間	直接比較①	直接比較②	直接比較③	直接比較④	直接比較⑤		
10月	7時間	直接比較⑥	直接比較⑦	間接比較①	間接比較②	間接比較③	間接比較④	間接比較⑤
11月	3時間	応用①	応用②	応用③				

【図10：小単元計画】

カ 本時の目標

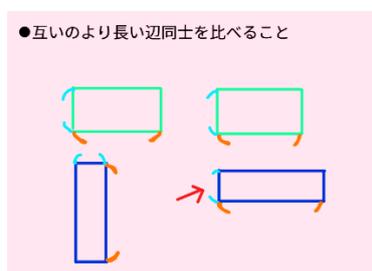
単元目標を基に、学習集団全体の目標として本時でどこまでをねらいとするかを検討し、「2つのものの長さを比べる」ところまでとすると確認した(図11)。

本時の目標 (細かく具体的に 個別の指導課題)

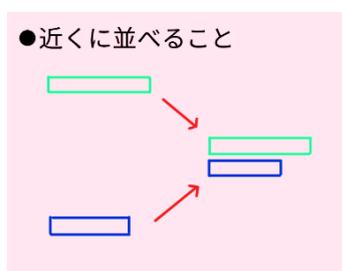
- ・2つのものの長さを比べる方法を知り、正確に長さを比べることができる。(知識・技能) (知識・技能)
- ・2つのものの長さを正確に比べて、どちらが長い、短い、同じかを判断し、言葉で伝えることができる。(思考・判断・表現力)
- ・ミッションをクリアするために、自分から長さを比べようとする。(学びに向かう力・人間性)

【図11：本時の目標アイデア例】

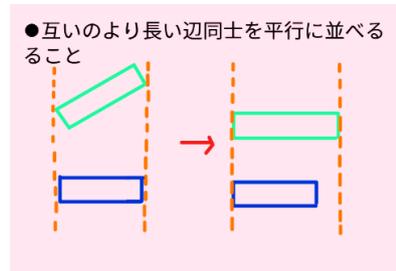
また、正確に長さを比べるために、必要な見方・考え方は何かを検討した。以下のような見方・考え方が必要と挙げられた。(図12～16)。そこで、本単元で身に付けてほしいポイントとして、①比べるもの同士を平行に近付けること【2つをくっ付ける】(図13、14)、②一方の端を揃えること【下にくっ付ける】(図15)、③長い方の両端に垂直に補助線を引くこと【上をくっ付ける】(図16)の3つと確認した。【 】内は、児童にとって分かりやすい表現を考えた。



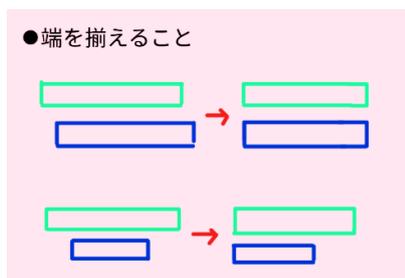
【図12】



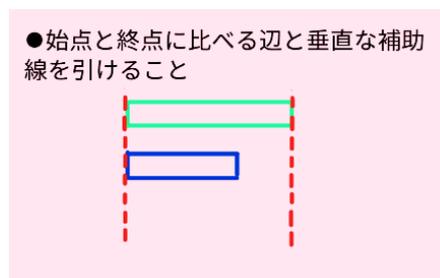
【図13】



【図14】

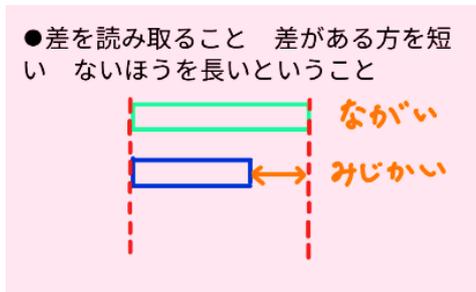


【図15】

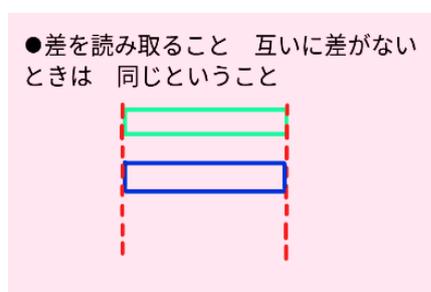


【図16】

さらに、「長い」「短い」「同じ」を判断するために、必要な見方・考え方として、補助線を引いた上で、その差(すきま)がある方を「短い」、ない方を「長い」、両方とも差(すきま)がないときは、「同じ」ということを確認した(図17、18)。



【図17】



【図18】

<成果：○ 課題：△>

- 単元づくりでは、児童の興味を生かすこととした。全校授業研究会対象グループではダンジョンをクリアするためのミッションに取り組み、他グループでは食べ物やキャラクター、歌、絵本などを身近な物を取り入れることで、主体的に楽しく学習に取り組む姿が見られた。
- 教具づくりについて、全校授業研究会対象グループでは2つの物の長さを比べるために、身に付けてほしい見方・考え方を自然と働かせられるような教具「ピタッとくん」を制作した。また、繰り返

返し教具を使う中で、見方・考え方を働かせるための「すきま」「ぴたっと」「くっつける」などの言葉掛けを行った。その結果、見方・考え方を身に付け、教具がない場面でも、一方の端を揃えようとする姿が見られた。他のグループでも、それぞれの形の特徴「角の数の違い（丸は角なし、三角は3つ、四角は4つ）」を確認しやすく工夫したなぞり書きをする教具を作成し、取り組む際には、丸は「ぐるっと」、△は「トゲトゲトゲ」、四角は「カクカクカク」といった形の特徴を捉える見方を働かせる言葉掛けを行った（図19、20）。



【図19：形をなぞり書きする教具】



【図20：丸のなぞり書きをする児童】

○全校授業研究会対象グループでは、「算数ダンジョン～長さくらべ～」等の学習を行った。児童Aは、最初は「どちらが長い？どちらが短い？」と聞いても自分で判断できず、教師の言葉をオウム返しするのみであった。しかし「ピタッとくん」を使うことで、下端、上端、比べるもの同士をくっつけるなど直接比較の方法を身に付け、「すきま」がある方が短い、ない方が長いという判断基準を理解することができた。繰り返し学習し、「ピタッとくん」を使う前にどちらが長いか予想すると、「ピタッとくん」なしで自分で長短を判断して答えることができるようになった。「すきま」という言葉で、長さの差の違いを見る見方や、「ピタッとくん」で正しく長さを比べるためには、「端を揃える」といった考え方を身に付け、自信をもって自分で判断できるようになったと考えられる。また、学部集会で行った長さの違い旗の方に集まるゲームでは、自分で長さを判断して移動できたり、修学旅行先の水族館で、うなぎやチンアナゴなどの生き物を見て「長い」と答えたり、学んだことを発揮することができた。

△今回作成した「ピタッとくん」では、上端の基準線にすきまがある方が短い、すきまがなくピタッとしている方が長いといった見方・考え方を働かせる教具であった。一種類の教具だけではなく、様々な操作や感覚で長さを感じられるような教具なども考える必要がある。

## （2）児童が主体的に学び、その学びを実感できる手立ての検討と実践

### ①要点を絞った一単位時間の授業づくり

・学部における授業づくりで大切にしたいポイントに焦点を当てた授業改善の積み重ね

「学びを実感するための手立て（主に教具、ICT活用、振り返り方法）についての有効性と改善案」を協議題として、授業検討を行った。

	事前授業研究会 9月5日（図21）	改善案
導入	<ul style="list-style-type: none"> <li>○前時の振り返り <ul style="list-style-type: none"> <li>・前時の板書で確認</li> <li>・クイズで用語確認</li> </ul> </li> <li>○本時の学習</li> <li>○めあての確認</li> <li>「一番長い色鉛筆を見つけよう」</li> </ul>	<p>→「一番長い色鉛筆を見つけよう」では全員同じ課題に取り組むことになり、個別の課題に取り組むために、全体のめあてを変更</p> <p>「ほんものの〇〇をみつけるために、ただしくながさをくらべよう。」</p>
展開	<ul style="list-style-type: none"> <li>○サイコロを振る。</li> <li>○長さを比べる <ul style="list-style-type: none"> <li>・ピタッとくんの使い方、ポイントの確認</li> <li>・「ピタッとくん」を使って、長さが全て違うものから、一番長いものや、短いものを見つける課題。結果は、トーナメント表を使って確認</li> </ul> </li> </ul>	<p>→トーナメント表が分かりづかったことと、ダンジョンに必要なものを手に入れるミッションにするために、同じ長さのものから一つだけ違う長さの本物を見つけるミッションに変更</p>

<p>まとめ</p>	<p>○全体での振り返り ・長さを比べた結果を写真で確認</p> <p>○個人で振り返り ・どっちが長い判断する課題プリント ・キャラクターのレベルアップ(なぜレベルアップしたかは示さず)</p>	<p>→できた結果だけでは、ポイントに気を付けて教具を扱っている様子を振り返りづらかったため、動画で、長さを比べている場面を提示 →プリントは、他の振り返り方法で十分なためなし →学んだことを確認し、その結果キャラクターのレベルアップにつながることで学習意欲が高まると考え、レベルアップの理由(ピタッとそろえられたから等)を提示</p>
<p>教具</p>	<p>○ピタッとくん</p>	<p>→部材が同じ色だったため、「ここ」と指さして確認する必要があったが、部材を色分けすることで、「黄色いところ」と分かりやすく伝えられるように改善 →端を揃える補助線を動かすとぐらつきがあり、正確に長さを比べられなかったため、ぐらつきをなくし、正確に比べられるように変更</p>
<p>T2 の役割</p>	<p>○児童の補助のみ</p>	<p>→ロイロノートのアンケートで振り返っていたが、実際長さを比べている様子を振り返る方が学びの実感につながると考え、T2が写真、動画撮影をすることに →児童の学習意欲をより高めるため、ミッションを与え、ミッションクリアの判定をする神様の役割を設定</p>



【図21 9月5日事前研究授業】

・他の学習グループの授業について知る・考える会の設定

他のグループの国語科・算数科の振り返りとICT活用について紹介し合った。その中で、めあてを達成できていた様子について動画で振り返る方法が有効だと確認できた(図22)。



【図22 授業について知る・考える機会】

<成果：○ 課題：△>

- 全校授業研究会対象グループでは、T2の役割を児童の補助のみから「ダンジョンの神様」とし、ミッションの提示やクリアの判定を行うことで、児童の興味を高めることができた。
- まとめについて、「他の学習グループの授業について知る・考える会」で動画での振り返りが効果的だったことを受け、他の学習グループでも取り入れ、学んだことや気を付けているポイントなどを効果的に振り返ることができた。
- △全校授業研究会対象グループでは、2つの物の長さを比べる様子を動画で振り返る場面と、ミッションをクリアできたかどうか判定する場面、クリアした結果キャラクターがレベルアップする場面など、複数の振り返りの場面があった。めあてに立ち返った振り返りに絞り、分かりやすく学んだことを実感できるように振り返り方法を工夫していきたい。
- △全校授業研究会対象グループでは、一人ずつ教具を用意して実態に合わせたミッションを提示することで、一人一人が課題に集中して取り組むことができた。一方で、児童同士の学び合いの機会が少なかった。児童が他の児童に教える役割や、ミッションのクリアを判定する役にするなどの工夫が考えられる。他のグループでも、実態に合わせた個別の課題に取り組むことが多いが、全体で共通の課題に取り組む場面を設定していきたい。

②ICTの活用と改善

- ・活用のねらいの明確化
- ・活用方法の改善の積み重ね

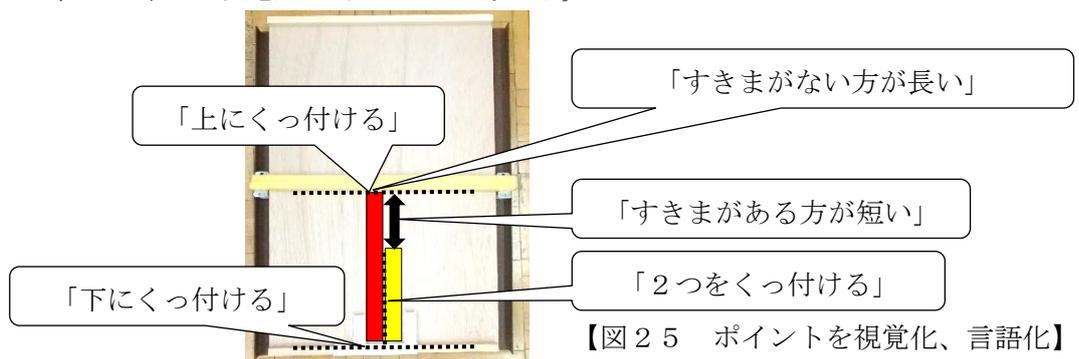
当初は振り返り場面で、ロイロノートのアンケート機能を用いて長さを比べた結果を確認したり、正しく比べられたかを自己評価したりしていた。また、写真で、長さを比較した結果を確認した(図23、24)。



【図23、24：長さを比べた結果の確認と自己評価】

改善・・・アンケート機能では、教師と一緒に結果を確認し、機械的にアンケートに答えていくといった確認に留まり、学びの実感には繋がらなかった。学びを実感できるように、長さを比べている様子を動画や写真で振り返り、積み重ねる。見方・考え方(ポイント)に気付いてできたとき視覚化、言語化して確認するようにする。

これまでの授業で取り上げてきたポイント(見方・考え方)を、児童にとって分かりやすくICTを活用して視覚化、言語化して積み重ねて確認できるようにした(図25)。授業では、ポイントを言葉掛けだけではなく、児童が実際に比べたものを写真で撮り、ペイント機能を使ってポイントを視覚化、言語化して説明することで、より学びの実感につながったと考える。



【図25 ポイントを視覚化、言語化】

## <成果：○ 課題：△>

○これまで感覚的に学習してきた見方・考え方を、視覚化、言語化して確認することで、課題に取り組む際に、児童が「すきまがある方が短い」「くっ付ける」と話しながら取り組むようになり、より学びを実感することにつながった。

△一部の学習グループでのみ、タブレット端末を使用していた。他の学習グループでも、使用することができるよう、色、形、線結び、マッチングなどを学習することができるアプリを使っていくこととした（図26）。



【図26：アプリ（知育アプリなぞってマッチング©HoroGames）でマッチングに取り組む児童】

△児童にとって学ぶことや、学んだことの積み重ねを見える形にすることが不十分であった。学んだことを児童のどのような姿で評価するのか明確にし、ICTを活用して学んだことを一人一人記録したり、次に学ぶべきことを視覚的に確認したりできるようにしていきたい。

## 8 成果と課題のまとめ

### 成果

- ・指導内容確認表を基に、複数の教師で実態把握を行うことで、概念の確認からはじめ、直接比較、間接比較へと系統的に指導していく、といった実態に合った単元計画を立てることができた。
- ・単元題材一覧表を基に、教科で身に付けた見方・考え方を人とのやりとりの中で発揮する場面を検討した。学部集会や各学校との交流でのゲームで「長さ」や「数唱」など算数で身に付けた見方・考え方を発揮し、様々な人からできたことを評価されることで学びを実感することができた。
- ・「正確に長さを比べる」「色、形を見分ける」などの単元の目標を達成するために、必要な見方・考え方は何かを検討し、その中から「2つをくっ付ける」「上を揃える」「下を揃える」「角の数の違い」などに絞って学習することにした。その見方・考え方を自然と働かせられるような教具や、教具に取り組む中で「比べる」「すきま」「ピタッと」「ぐるっと」「トゲトゲトゲ」など分かりやすい言葉掛けを行った。その結果、教師がポイントを伝えず、児童が教具に取り組む中で自ら見方・考え方を身に付けていくことができた。
- ・めあてを達成している学習の様子をタブレット端末で動画を撮影し、振り返りの場面で、自分のできたことを確認したり、児童同士ががんばりを認め合ったりし、学びの実感につながった。

### 課題

- ・各学習グループでそれぞれ実態に応じた個別の教具や課題を用意したが、共通の課題に取り組む対話的な学びの場面が相対的に少なかった。
- ・振り返り場面で、めあてやミッションの達成についてなど複数の内容を扱ったため、分かりやすいめあてを設定し、めあてと振り返りのつながりを児童にとって分かりやすくする必要があった。
- ・ICT活用として、授業の振り返りで教師が動画を提示してきたが、身に付けてきたことを児童自らが確認できるような形での積み重ねが難しかった。

中 学 部

# 中学部の研究について

## 1 研究主題

生徒が主体的に学び、その学びを実感する授業づくり（2年／2か年）

## 2 学部研究の重点

- ・単元や授業の目標と評価を明確にし、他の学習活動や日常生活との関連を図った単元題材づくりを積み重ね、生徒の主体的な学びや学びの実感につなげる。
- ・国語科の授業において生徒が主体的に学び、1 単位時間の学びを実感するための学習活動やめあての設定、振り返りや手立ての在り方、ICT機器の効果的な活用方法を明らかにする。

## 3 重点の設定理由

昨年度は、生徒が主体的に学び、その学びを実感する授業づくりとして、国語科の単元づくり、授業づくりに取り組んだ。生徒が自信をもって学んだり、学んだことを実感したりするための導入や振り返り、支援の在り方について検討した。生徒の実態把握を学習指導要領に基づいて丁寧に行い、小单元ごとの生徒の変容を見取りながら改善を繰り返した。それによって、生徒の実態に合わせた内容を設定したり、生徒に寄り添った支援を検討したりすることができ、生徒の主体的な学びにつなげることができた。しかし生徒が学びを実感するためのめあてや振り返りの在り方には課題が残った。また、単元や授業での学びは他の学習場面で生かすことを通して、自信の学びとして実感することができると考えるが、国語科での学びを他教科や日常生活において発揮する機会を設定したり、見取ったりすることができなかった。また、国語科の授業において、ICT（ロイロノート）を活用した授業づくりを行ったが、さらに効果的な活用方法について模索していく必要がある。

そこで昨年度までの成果と課題を受けて、学部研究の重点を上記の二点とした。単元や授業の目標と評価を明確にし、他の学習活動や日常生活との関連を検討しながら単元題材づくりを積み重ねることで、生徒の主体的な学びや学びの実感につなげることができると考える。また、国語科の授業において学習活動やめあて、振り返りや手立ての在り方について実態を踏まえて検討することで、生徒が主体的に学び、自身の学びを実感することができると考え、重点を設定した。

## 4 研究仮説

国語科を対象教科とし、目標や評価を明確にし、他の学習場面や日常生活等と関連付けた単元づくり、及び一単位時間の授業におけるめあてや振り返り、手立てなどを工夫しながら授業改善を積み重ねる。これらの実践を積み重ねていくことで、単元や授業の質が向上し、生徒一人一人が目的意識をもって主体的に学習活動に取り組み、学びを実感する姿を実現することができるだろう。

## 5 研究内容・方法

### （1）生徒が学びを実感できる単元づくり

- ①生徒の丁寧な実態把握
  - ・学習指導要領に基づいた、複数の教師による実態把握と共有
  - ・生徒の実態の定期的な見直し
- ②生徒が学びを生かすことができる単元の立案
  - ・年間を見通せる単元題材一覧表の作成
  - ・国語科と他の学習活動と効果的な関連の検討と改善
- ③元の検討と改善の積み重ね
  - ・単元の目標や内容の検討と精選
  - ・授業で取り上げる題材や教材の検討、改善
  - ・単元改善の過程の可視化と共有

## (2) 生徒が主体的に学び、その学びを実感できる手立ての検討と実践

- ① 学びの実感に関する要点を絞った一単位時間の授業づくり
  - ・ 学びの実感につながるめあてと振り返りの検討
  - ・ 要点に沿った授業改善の積み重ねと有効な手立ての具体化
  - ・ 他の学習グループの授業について知る・考える機会の設定
- ② 研究授業の実践
  - ・ 事前授業研究会の実践
- ③ ICTの効果的な活用と改善
  - ・ 国語科の学習活動におけるICTの継続的な活用と改善

## 6 中学部研究計画

月	主な内容
4月	<p><b>【研究日】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 中学部研究の方向性の確認</li> <li>・ ICTミニ研修（電子黒板、モニター）</li> </ul> <p><b>【単元・題材検討日①】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ みんなのためにプロジェクト（総合的な学習の時間における学部合同学習）と各教科間のつながり</li> </ul>
5月	<p><b>【単元・題材検討日②】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 実態把握（指導内容確認表／熊本大学教育学部附属特別支援学校を基に）</li> <li>・ 国語科で大切にしたい点の検討</li> <li>・ 国語科の年間指導計画の検討</li> <li>・ 国語科とみんなのためのプロジェクト、各教科間のつながりの検討</li> </ul> <p><b>【研究日】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 国語科で目指す「主体的に学ぶ姿」「学びを実感する姿」の検討</li> <li>・ 学習指導要領各教科等編中学部国語科の目標の確認</li> <li>・ ICTミニ研修（ロイロノート）</li> </ul>
6月	<p><b>【研究日】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 国語科で目指す「主体的に学ぶ姿」「学びを実感する姿」の確認</li> <li>・ 学習指導要領各教科等編中学部国語科の内容、教科書（星本）の内容の確認</li> <li>・ 全校授業研究会に向けて（単元計画の検討①）</li> <li>・ ICTミニ研修（ロイロノート）</li> </ul>
7月	<p><b>【研究日】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 「学びの実感」のための手立ての検討</li> <li>・ 国語科描くグループの実施内容と生徒の様子の共有</li> <li>・ 全校授業研究会に向けて（単元計画の検討②）</li> </ul> <p><b>【単元・題材検討日③】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 国語科各グループの取り組みの振り返りと年間指導計画の見直し、共有</li> <li>・ 単元題材一覧表の見直し</li> <li>・ 対象グループの単元・題材構想の検討（単元題材構想シートを用いて）</li> </ul> <p><b>【中学部教材展示会】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 国語科、数学科の教材展示</li> </ul>
9月	<p><b>【研究日】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 「中学部国語科で大切にしたいこと」の再検討</li> <li>・ 研究対象グループ生徒における「主体的に学ぶ姿」「学びを実感する姿」の検討</li> <li>・ 授業を見合う会</li> <li>・ ICTミニ研修（ロイロノート）</li> </ul> <p><b>【単元・題材検討日④】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 前期のみんなのためにプロジェクト、各教科の取り組みの確認と共有</li> </ul>

10月	<b>【小学部全校授業研究会】</b> ・小学部算数科全校授業研究会 <b>【研究日】</b> ・小学部全授業研究会の成果と課題の振り返り ・全校授業研究会に向けて（指導案検討①、②） ・事前授業研究会 <b>【単元題材検討日】</b> ・事前授業研究会、事後研究会を受けて
11月	<b>【研究日】</b> ・全校授業研究会に向けて（模擬授業等） <b>【中学部全校授業研究会】</b> ・全校授業研究会授業提示、研究会
12月	<b>【研究日】</b> ・中学部全校授業研究会を終えて <b>【高等部全校授業研究会】</b> ・高等部全校授業研究会
1月	<b>【研究日】</b> ・学部研究のまとめ（成果と課題） <b>【単元・題材検討日⑤】</b> ・全校縦割りグループで実施
2月	<b>【単元・題材検討日⑥】</b> ・今年度の振り返り
3月	<b>【研究日】</b> ・次年度の研究に向けて

## 7 研究の実際

### (1) 生徒が学びを実感できる単元づくり

#### ① 生徒の丁寧な実態把握

- ・学習指導要領に基づいた、複数の教師による実態把握と共有
- ・生徒の実態の定期的な見直し

学習指導要領の指導内容確認表（熊本大学教育学部附属特別支援学校）を基に、国語科の各グループ（A～Cグループ）で実態把握を行った。5月に1回目の実態把握を行った上で国語科の授業を行った。できている内容には○、理解度が曖昧である内容に△、課題がある内容には×を付けた。その際見られた生徒の様子や理解度を踏まえ、7月にもう一度実態把握を行い、実態を見直し、学部職員で共通理解を図った（図1）。その実態把握を活用して国語科の年間指導計画や単元ごとの目標を年度当初に検討した。

項目	小学部			1段階	2段階	
	1段階	2段階	3段階	1段階	2段階	
(1) 言葉の特徴や使いかた	言葉の働き	ア (7) 身近な人の話し掛けに慣れ、言葉が事物の内容を表していることを感じる。	ア (7) 身近な人の話し掛けや会話などの話し言葉に慣れ、言葉が、気持ちや要求を表していることを感じる。	ア (7) 身近な人と会話や読み聞かせを通して、言葉には事物の内容を表す働きや、経験したことを伝える働きがあることに気付くこと。	ア (7) 身近な大人や友達とのやり取りを通して、言葉には、事物の内容を表す働きや、経験したことを伝える働きがあることに気付くこと。	
	話し言葉		イ (1) 姿勢や口形に気を付けて話すこと。	イ (1) 発音や声の大きさに気を付けて話すこと。	イ (1) 発音や声の大きさに気を付けて話すこと。	
	読書	イ (4) 日常生活でよく使われている平仮名を読むこと。	イ (4) 日常生活でよく使われる、長音などが含まれた語句、平仮名、片仮名、漢字の正しい読み方を知ること。	イ (4) 日常生活でよく使われる、長音などが含まれた語句、平仮名、片仮名、漢字の正しい読み方を知ること。	イ (4) 発音、抑音、促音、撥音、助詞の正しい読み方や書き方を知ること。	イ (4) 長文や短文。
	文や文章	イ (4) 言葉のもつ音やリズムに触れたり、言葉が表す事物やイメージに触れたりすること。	イ (4) 身近な人と会話の話題に触れること、物の名前や動作など、いろいろな言葉の種類に触れること。	イ (4) 言葉には、意味による語句のまとまりがあることに気付くこと。	イ (4) 言葉には、意味による語句のまとまりがあることを理解することともに、話し方や書き方によって意味が異なる語句があることに気付くこと。	イ (4) 表す範囲。
	言葉遣い		イ (4) 文の中における主語と述語との関係や助詞の使いかたにより、意味が変わることを知る。	イ (4) 主語と述語の関係や接続する語句の役割を理解すること。	イ (4) 主語と述語の関係や接続する語句の役割を理解すること。	イ (4) 移ること。
(2) 長短情報	音読		イ (4) 正しい姿勢で音読すること。	イ (4) 語のまとまりに気を付けて音読すること。	イ (4) 内。	
	情報と情報の関係		イ (7) 物事のはじめと終わりなど、情報と情報との関係について理解すること。	イ (7) 事柄の順序など、情報と情報との関係について理解すること。	イ (7) 考。	
(3) 我が国の言語文化	伝統的な言語文化	イ (7) 昔話などについて、読み聞かせを聞くなどして楽しむこと。	イ (7) 昔話や童話の取調などの読み聞かせを聞き、言葉の響きやリズムを楽しむこと。	イ (7) 昔話や神話・伝承などの読み聞かせを聞き、言葉の響きやリズムを楽しむこと。	イ (7) 易。	
	書き	イ (7) 書くことに関する次の事項を理解し使うこと。 ① いろいろな筆記用具に触れ、書くことを知る。 ② 書くことに関する次の事項を理解し使うこと。 ③ 筆記用具の正しい持ち方や書くときの正しい姿勢を理解して、字を書きやすさや書きやすさなど、書きの基本的な身に付けること。	イ (7) 書くことに関する次の事項を理解し使うこと。 ① 書くことに関する次の事項を理解し使うこと。 ② 筆記用具の正しい持ち方や書くときの正しい姿勢を理解して、字を書きやすさや書きやすさなど、書きの基本的な身に付けること。	イ (7) 書くことに関する次の事項を理解し使うこと。 ① 書くことに関する次の事項を理解し使うこと。 ② 筆記用具の正しい持ち方を正しく、平仮名や片仮名の文字の形に注意しながら丁寧に書くこと。 ③ 点画相互の揺れ方や交わり方、長短や方向などに注意して文字を書くこと。	イ (7) 易。 イ (7) 易。 イ (7) 易。	
	書写		イ (9) 書くことに関する次の事項を理解し使うこと。 ① 書くことに関する次の事項を理解し使うこと。 ② 筆記用具の正しい持ち方を正しく、平仮名や片仮名の文字の形に注意しながら丁寧に書くこと。	イ (9) 書くことに関する次の事項を理解し使うこと。 ① 書くことに関する次の事項を理解し使うこと。 ② 筆記用具の正しい持ち方を正しく、平仮名や片仮名の文字の形に注意しながら丁寧に書くこと。	イ (9) 書。	

【図1：指導内容確認表を用いたAグループの実態把握】

<成果：○ 課題：△>

- 指導内容確認表が客観的な指標となり、生徒の得意な内容や苦手な内容、中学部または小学部の何段階の理解度なのかを具体的に実態把握することができた。
- 5月の段階では△（理解度が曖昧）だったが、授業を通して×（課題がある）に変わるなど実態の見直しをすることができた。
- 各グループが指導内容確認表を用いて実態把握したことで、生徒が学習するとよい内容が明確化され、年間指導計画を立案しやすくなった。
- △指導内容確認表を年度当初活用したが、年度末にもう一度チェックすることで、生徒の変容を確認することもできる。また、チェックが入った表を次年度に引き継ぐことで、次年度の年間指導計画の作成に生かすことができると考える。

- ・「主体的に学ぶ姿」、「学びを実感する姿」、国語科の指導において大切にしたいことの検討  
 中学部国語科における、「主体的に学ぶ姿」、「学びを実感する姿」を検討、整理し（全校研究資料2）、全校授業研究会対象グループについては「主体的に学ぶ姿」、「学びを実感する姿」をさらに具体化した（中学部研究資料1）。また、その姿を目指し、国語課の指導において大切にしたいことを検討し、共通理解を図った（中学部研究資料2）。

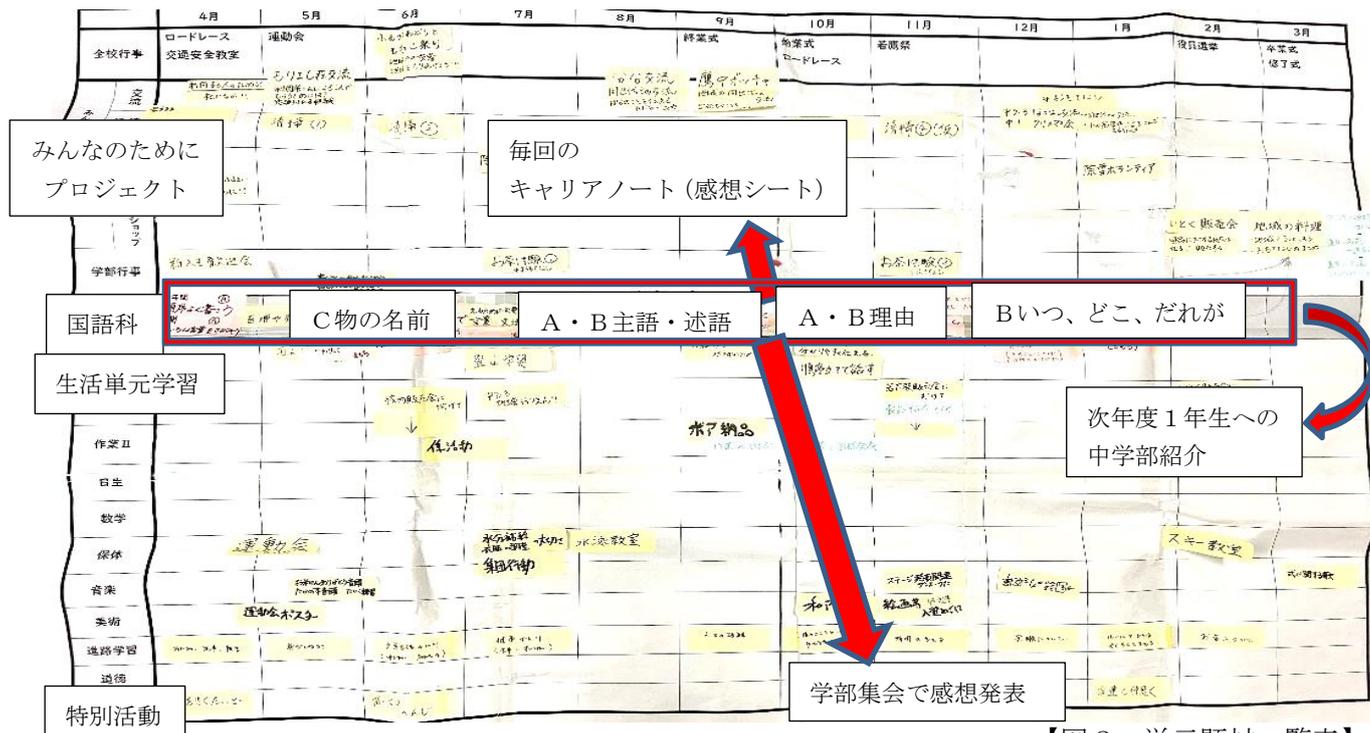
<成果：○ 課題：△>

- 生徒の目指す姿を具体的にイメージし、学部職員で共有しながら授業づくりを進めることができた。
- 国語科で大切にしたいことを検討、共通理解したことで、学部全体で方向性をそろえて授業づくりに取り組むことができた。

②生徒が学びを生かすことができる単元の立案

- ・年間を見通せる単元題材の一覧表の作成
- ・国語科と他の学習活動との効果的な関連の検討と改善

国語科での学びは日常生活で発揮する場面が多いが、他教科での学習活動の中に発揮する場面を設定することで、教師が生徒の学びを発揮する姿を見取ることができるとともに、それを生徒にフィードバックすることで生徒も自身の学びを実感することができると考えた。そのため、4月に単元題材一覧表を作成し、1年間で取り扱う学習活動とその内容を一覧にするとともに、5月に研究対象教科である国語科との関連を図った（図2）。単元題材一覧表を作成、活用し、生徒が国語科での学びをどの場面で発揮できるのか検討した。



【図2：単元題材一覧表】

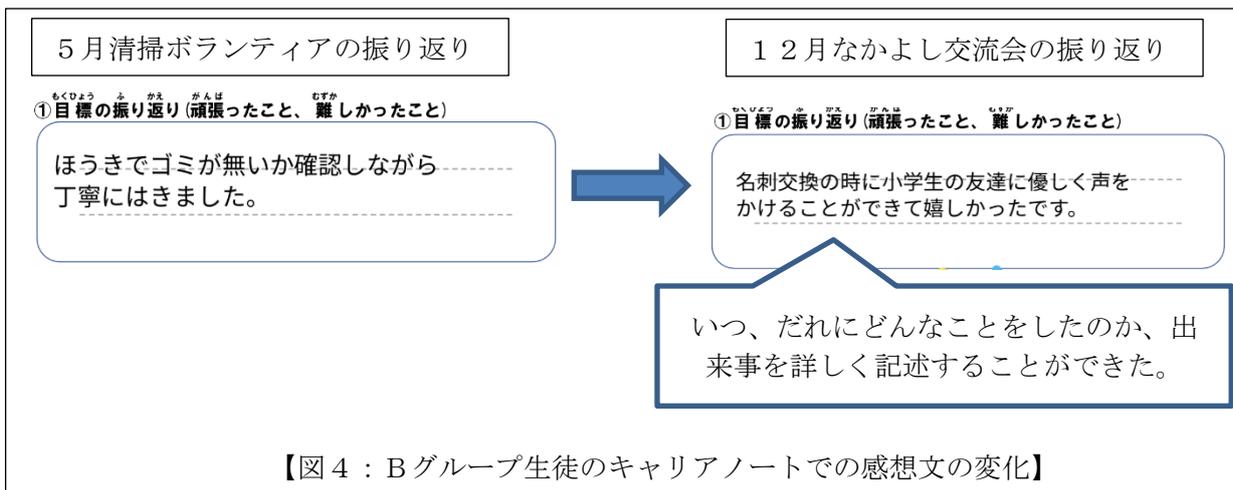
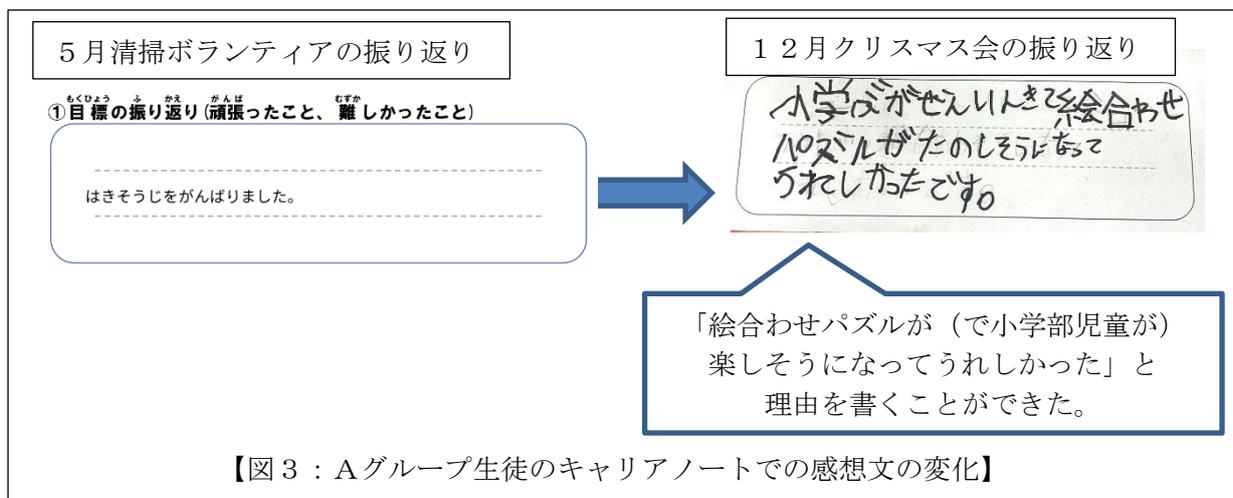
今回研究授業で取り上げたA・Bグループの理由を話す単元、Bグループの「いつ、どこで、誰が、何をした」で整理して話す単元、Cグループの身の回りの物の名前を確認する単元を発揮する学習、場面を他教科に設定、計画した。

ア 総合的な学習の時間「みんなのためにプロジェクト」キャリアノートの記入

国語科の学びを発揮できるよう、生徒が振り返りを記入する際、教師が「どうして嬉しかったのですか」「いつですか」「誰と活動しましたか」など生徒に問い掛け、対話を通して記入を進めるようにした。

<成果：○ 課題：△>

○年度当初、活動の振り返り欄に「頑張った」「嬉しかった」や、やったことのみ書く生徒がいた。後期のキャリアノートの感想に「～になって、嬉しかった」のようにどうして嬉しかったのかという理由も踏まえて記入するようになった(図3)。「いつ、どこで、誰が、何をした」で具体的に説明する単元を学習したBグループの生徒は「いつ、誰に」と状況を詳しく記入するようになってきた(図4)。



△様式が「目標の振り返り(頑張ったこと、楽しかったこと)」となっており、生徒が自主的に気持ちの理由を書くことが難しかった。より国語での学びを主体的に発揮し、教師も生徒も学びを発揮できたと実感することができるように、「どうしてそのような気持ちになったのか」という理由を書く記入欄を設けるなど、様式の検討が必要であった。

イ 特別活動における学部集会での感想発表

学部集会で夏休みや冬休みの感想、行事の感想を発表し、友達の発表に対して質問する時間を設けることを計画した。

**<成果：○ 課題：△>**

- 「～が楽しかったです。なぜなら～」と感想を話したり、「どうして～したのですか」など友達に理由を質問する姿が見られた（写真1）。
- △学部集会は毎月行われるので、継続して感想発表の時間を設けられるとよかった。



発表する様子】

ウ 合同生単における、次年度の1年生への中学部紹介の作成

12月の研究日で、年度末に中学部合同の生活単元学習にて、来年度中学部に入学予定の生徒への中学部紹介動画を作成する単元を計画した。Bグループは各行事や学習が「いつ、どこで、誰と」行われるのか、Aグループはその活動がどんな学習なのか（楽しい、難しいなど）を理由を付けて説明、Cグループはそれぞれの学習で用いる物の名前や用途を言葉やジェスチャーで説明するという内容である。このように、国語各グループが学習した内容に基づき、説明を考える学習を計画した。新生を迎える会の準備として、3月に計画している。

**<成果：○ 課題：△>**

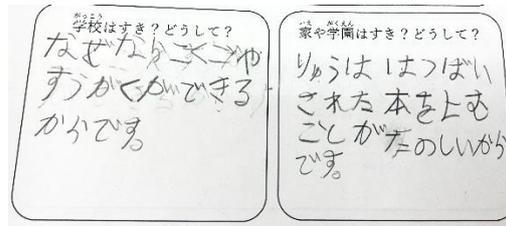
- 単元題材一覧表を活用しながら、国語科全グループの学びを発揮できる単元を学部職員全員で立案することができた。
- △他教科や他の活動との兼ね合いから年度末の実施となる。評価の時期が過ぎてからの実施となってしまった。年度当初に計画的に国語科での学びを発揮する単元を設定できるとよい。

エ 日常生活や他の学習場面での様子

国語科での学習を他の学習場面で発揮できるよう、学部職員全員で場面を設定したり、日常的に理由を問い掛けたりした。

**<成果：○ 課題：△>**

- 普段の会話の中で、「どうしてですか」などと教師が理由を問い掛けることを継続したことで、生徒からも「理由を教えてください」など質問することが増え、会話が弾むようになってきている。
- 音楽の振り返りの場面で「この曲が好きな理由は何ですか？」と生徒に質問したり、生活単元学習の中で「学校は好きですか？どうしてですか？」などの質問用紙に答えを記入する時間を設けたりした（写真2）。「理由は～」「なぜなら～」と国語科で学習した言葉を用いて理由を説明することができた。



【写真2：生活単元学習 質問用紙】

③単元の検討と改善の積み重ね

- ・単元の目標や内容の検討と精選
- ・授業で取り上げる題材や教材の検討、改善
- ・単元改善の過程の可視化と共有

単元題材構想シート（中学部研究資料3）を用いて、学部職員全員で単元の目標、指導計画、扱う題材について検討、改善を重ねてきた（図5、6）。

ア 単元の目標の検討

単元の検討を積み重ね、単元の目標を具体的に、端的になるよう検討・改善した（図5）。

	知・技	思・判・表	学、人
検討1	・主語・述語、つなぎ言葉の働きを知る。	・相手に伝わるように順序や構成を考えて書いたり、声の大きさに気を付けて発表したりする。	・未定
検討2	・理由を表す接続する語句の働きや構成、適切な発表態度を知る。	・主語・述語、接続する語句を正しい構成で組み立て、声の大きさや態度に気を付けて発表する。	・相手に伝わりやすい発表にしたり、友達の発表の内容を聞き落とさないように集中して聞こうとしたりする。
検討1	・理由を表す言葉の働きや文の構成について知る。	・自分の考えの理由となる事柄が分かり、理由を表す言葉を用いて文をつくる。	・声の大きさや話す速さ、発表態度に気を付けて相手に伝える。

【図5：Aグループ国語科の単元の目標の改善】

単元の目標 改善点 <より端的に、より具体的に、実態を踏まえて>

- ・「主語・述語」は前単元に設定し、本単元は「理由の伝え方」に限定
- ・「つなぎ言葉」「接続する語句」を「理由を表す言葉」に限定
- ・単元全体で見たときに「文章を書く」ことよりも「(文を組み立てて)話す」ことを重視
- ・「聞き取る」よりもまずはしっかり「伝える」ことに重点(声の大きさ、話す速さ、態度)

【図6：Aグループ 単元の目標の改善点】

単元の目標は生徒が何を学ぶのか、教師が何を評価するのかが明確になるよう、「より端的に、より具体的に」なるよう検討した。また、生徒にとって難しすぎる目標になっていないか「実態を踏まえて」目標を設定した。

検討1では「主語・述語、つなぎ言葉」を取り上げることとしていた。だが、単元の内容を生徒がより理解することができるよう、主語・述語は前単元で丁寧に扱い、本単元ではつなぎ言葉の中でも「理由を表す言葉(なぜなら～、理由は～、なぜかという～)」に限定して扱うこととした。また、生徒の実態を踏まえ、「文章を書く」ことよりも「文を組み立てて話す」ことや、「相手の話を聞き取る」ことよりも「自分の気持ちを伝える」ことを重視するということに検討した。

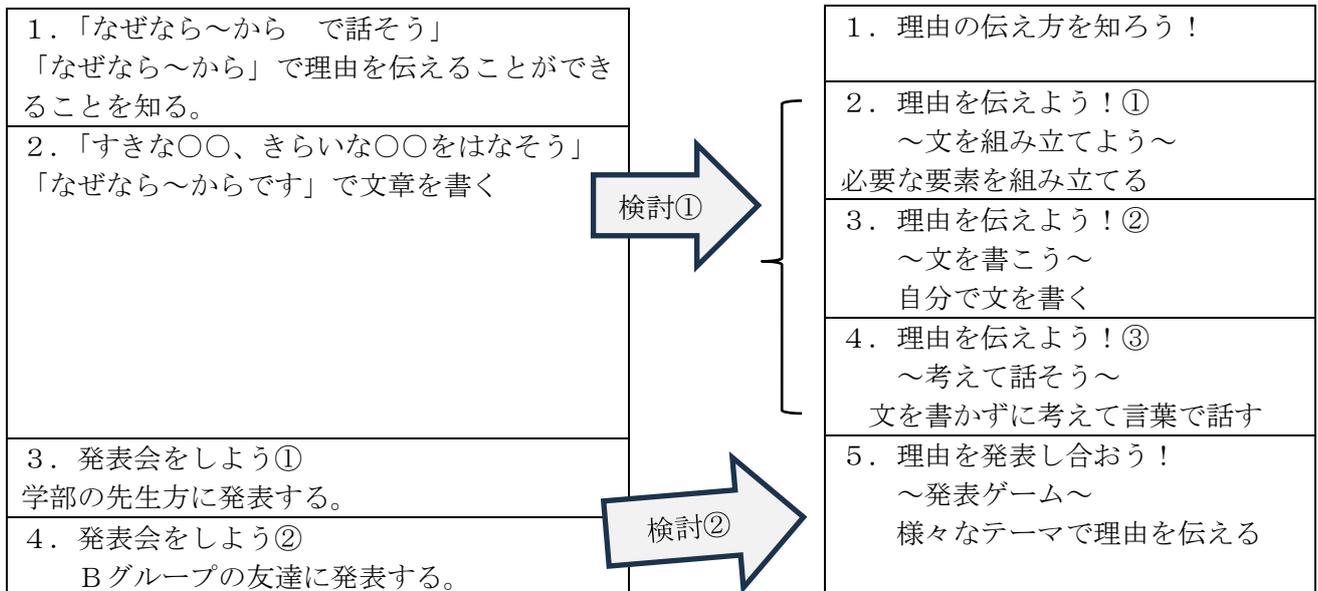
Bグループでも同様に検討してきた。Bグループは「自分の出来事を詳しく説明する」という目標を「いつ、どこで、誰が、何をした」のすべての要素を入れた文章を書く」と具体的に設定するという工夫をした。

<成果：○ 課題：△>

○目標を端的にしたことで、授業者は単元のねらいを理解し、ねらいからぶれることなく小単元や学習活動を組み立てることができた。また、それによって評価の視点も具体的になり、評価しやすくなった。

イ 指導計画

指導計画は、以下のように検討、改善をした(図6)。検討①、②はどちらも本単元での学びを他の学習場面や、日常生活で活用することを見通して検討した。



【図6：指導計画の検討・改善】

・検討①「小単元の細分化」

自分の意見の理由を文章で書いて話すという内容の単元だが、「文を組み立てる→文章を書いて話す→文章を書かずに考えて話す」のように、段階的に理由を考えて話す力を付けられるように小単元を構成した。実態差のあるグループであるため、全生徒が理解できるようそれぞれの小単元はテーマを変えて繰り返すこととした。

・検討②「生徒が主体的に発揮できる単元のゴールの設定」

単元のゴールとして、学部の職員やBグループの友達への発表会を設定していた。だが、Aグループの生徒は発表することに抵抗があることから、主体性が失われることが考えられた。そのため「発表会」を設定するのではなく、グループで楽しみながら単元の学びを発揮できるよう、ゲームを設定した。このゲームは、ルーレットでランダムにトークテーマが決まり、そのテーマの意見とその理由を一人ずつ話していくゲームである。このゲームを通して、文章を書かずに自分の意見とその理由を伝えるという前時までの学びを発揮することができると考え設定した。

<成果：○ 課題：△>

- 小単元を段階的に設定し、各小単元の学習を繰り返したことで、学習内容が少しずつレベルアップするが、実態差のあるグループ学習でも全生徒が学習内容を理解することができた。
- △繰り返しの学習によって実態の高い生徒は飽きてしまった。繰り返しの学習の中にも実態差に合わせた学習活動や、発展性のある働きかけ（支援を減らすなど）が必要だった。
- 生徒の実態に合わせた単元のゴールを設定したことで、生徒が楽しみながら自然と学びを発揮することができた。「欲しいもの」「行きたい場所」をテーマに、ルーレットで話す人を決め、ゲーム形式で伝え合う学習を行った。生徒は「韓国に行きたいです。ご飯がおいしそうだからです。」のように、文章を書かずに理由を話すことができた。

ウ 扱う題材、教材

星本の積極的な活用を進めてきた。その中で教科書の全文を用いた際、文章が長くて情報量が多く、生徒の主体性や学びの理解に結び付かなかった。そのため生徒の実態や授業のねらいに応じて教科書の活用部分の精選を行った。Aグループの理由を説明する単元では星本「自分の夢を話そう」を参考とした。教科書の全文を取り上げるのではなく、本文中の「なぜなら～からです」と理由を表している二文のみ扱い、理由の話し方を学習した。Bグループは自分の出来事を発表する授業において、「自分の夢を話そう」の後半にある「発表するときのポイント」の「話すとき」の部分のみ活用した。

<成果：○ 課題：△>

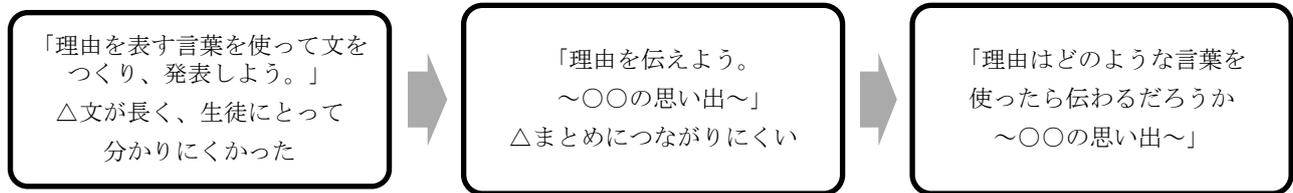
- 教科書の扱う部分を精選したことで、本学習で何を学ぶのか生徒が理解することができた。

## (2) 生徒が主体的に学び、その学びを実感できる手立ての検討と実践

### ① 学びの実感に関する要点を絞った一単位時間の授業づくり

- ・ Aグループの学びの実感につながるめあての検討

Aグループの研究授業でのめあては以下のように改善した(図7)。改善する際には、小学部全校授業研究会の課題を踏まえ、「生徒にとって分かる言葉か」「授業のゴールが分かる表現か」について検討し、まとめとのつながりを大切にした。



【図7：Aグループ研究授業におけるめあての改善】

- ・ B、Cグループの学びの実感につながるめあての検討

B、CグループもAグループ同様、めあてについて検討を重ねてきた。(表1)

Bグループ (「いつ、どこ、誰が」で出来事を整理する学習)	Cグループ (物の名前の学習)
めあて「土日のできごとを一文にしよう」 ・「いつ、どこ、誰が、何をした で整理して」という言葉をめあてにはいれず、展開の中で提示した。 ○めあての文章が端的になり、何を学習するのか生徒が理解することができた。	めあて「○○で使う物をさがそう！」 ○「何で使う物だろう」と授業に興味をもったり、生徒が思考を巡らせ、考える場面が増えたりした。

【表1：B、Cグループにおけるめあての工夫】

### <成果：○ 課題：△>

- ・ Aグループ

○めあてを授業のゴールが分かる表現にしたことで、生徒の言葉で「～を使うと伝わる」とまとめをすることができた。これを繰り返したことで、理由の伝え方を定着することができた。

△めあての文章が固定化してしまった。めあての中の「～○○の思い出」の部分は毎時間変わるが、「理由はどのような言葉を使ったら伝わるだろうか」の部分は毎時間同じであった。それによって毎時間同じまとめになり、生徒のレベルアップにつながらなかった。そのため、前時に「なぜなら」という表現を学習したら次時は『「なぜなら」以外にどのような言葉を使ったら理由は伝わるだろうか』というようにめあてもレベルアップした表現にするとよい。

- ・ 全グループ

○めあてを各グループの生徒が分かる表現、文量にした。これによって「何の学習か」「何がわかったらゴールか」を生徒が理解し、主体的に学習することができた。生徒がどのくらいの文章読解力があるのか実態把握したことで、それをもとにめあての表現を工夫することができた。

○めあてを疑問文にしたり、答えがわからない表現にしたりすることで、学習活動の中で生徒が答えを見付け、生徒の言葉でまとめることができ、学びの実感につながった。

△繰り返しの学習では、めあて、まとめが同じ表現になってしまった。学びの定着も重要だが、生徒が毎時間少しでもレベルアップすることができるよう、めあても発展性が必要だった。

・各グループの学びの実感につながる振り返りの検討

A～Cグループで生徒の実態に応じた振り返りの仕方を検討してきた（表2）。

Aグループ	
	<p>方法：ワークシートに記入</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・「分かった」「難しかった」を選択し、「何が分かったのか、何が難しかったのか」記入する。</li> <li>・教師と対話をしながら記入する。</li> <li>・担任からの欄を設定し、フィードバックする。</li> </ul> <p><b>&lt;成果：○ 課題：△&gt;</b></p> <p>○「何が分かったのか」「何が難しかったのか」本時の学びを具体的に振り返ることができた。</p> <p>○担任にコメントをもらうことで、次時のアドバイスをもらうことができた。</p> <p>△「分かったこと」「難しかったこと」に絞られ、毎回同じような振り返りになった。生徒が学びを実感するためには、これら以外の項目も必要である。</p> <p>△グループ内で振り返りを共有しなかったが、共有することで新たな発見があると考えられる。</p>
Bグループ	
	<p>方法：ロイロノートの様式に記入</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・今日できたことを選択する。</li> <li>・次頑張りたいことを入力する。</li> </ul> <p>入力に時間を要する生徒には選択肢を用意する。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・振り返りを全員で共有する。</li> </ul> <p><b>&lt;成果：○ 課題：△&gt;</b></p> <p>○選択肢があることで、生徒が一番できたことや次頑張りたいことを表現することができた。</p> <p>○全員の振り返りを提示することで、学びの共有をすることができた。</p>
Cグループ	
	<p>方法：板書、プリント学習</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・振り返りを板書し、全員で確認する。</li> <li>・個人の振り返りとしてプリントを用意する。</li> </ul> <p><b>&lt;成果：○ 課題：△&gt;</b></p> <p>○振り返りを口頭だけでなく板書することで、聞き取りが難しい生徒も板書を見て本時の学びを振り返ることができた。</p> <p>○プリントを用意することで、本時での自分のタブレット画面を見ながら問題に答えるなど本時の学びを生かす姿が見られた。</p>

【表2：各グループの振り返りの仕方と成果】

**<成果：○ 課題：△>**

○書くことができる生徒は文章で表現する、書字に時間が掛かる生徒にはめあてに沿った選択肢を与える、板書しながら全員で振り返るなど各グループの実態に応じて振り返りの仕方を検討することができた。どの振り返りの仕方でも、生徒が本時で何が分かったのか、何ができたのか表現するためには、振り返りの前にまとめの時間を設けたり、教師と対話をしたりすることが必要で、それによって生徒が本時の学びを理解しているのかが分かり、生徒も自身の学びを実感することにつながった。

△教師と対話をするすることで本時の学びを確認することができたが、学びの「実感」のためには、生徒自身が自分の言葉で「今日の学びはこれ」という様に表現できるとよい。そのための振り返りの在り方、手立てについては継続して検討が必要である。

・ Aグループ有効な手立ての具体化

ア T2の追加

これまでAグループはT1のみで授業を行ってきた。しかし授業を行っていく中で、生徒が自分の意見の理由を一人で考えるよりも、教師と対話をするを通して自分の考えが深まる姿が見られた。この様子を踏まえてT2を設定し、4名の生徒がそれぞれ考えを深めることができるようにした。

イ 生徒同士で伝え合う時間の設定

中学部の国語科では「伝える」をテーマとしてきた。そのため、国語科の授業の中でも積極的に生徒同士で伝える時間を設定した。全校授業研究会対象のAグループの単元は、自分の感想やそう思った理由を相手に伝わるように話す力を育みたいという思いから設定した。そのため「相手に伝わったか」「どうしたら伝わったのか」生徒が実感することが大切であった。本時ではペアで自分が書いた理由を伝える文章を伝え合い、その後友達から理由カードをもらう時間を設定した(写真3、4)。理由カードというのは、相手の発表を聞き、相手が話していた理由を聞き取って書くものである。グループ全体で発表することが苦手な生徒もペアで発表する形にすることで、抵抗感なく相手に伝える経験ができています。また、友達と理由カードを交換することによって、「相手に伝わって嬉しい」など自分の気持ちが伝わる喜びを感じる姿が見られた。また、理由カードを記入するため、友達の発表を聞き取ろうとする姿も自然と見られるようになり、話を聞く態度にもつながってきている。



【写真3：ペアでの伝え合い活動】



【写真4：理由カードを交換する様子】

<成果：○ 課題：△>

- 4名の生徒に対してT2を設けた。支援が手厚くなったことで生徒が自分の思考を深めることができ、自信をもって発表することにつながることができた。
- 理由カードを交換する活動を設定したことによって、「相手に伝わって嬉しい」など自分の気持ちが相手に伝わる喜びを感じる姿が見られた。また、理由カードを記入するため、友達の発表を聞き取ろうとする姿も自然と見られるようになり、話を聞く態度にもつながってきた。

・他の学習グループの授業について知る・考える機会の設定

A～Cグループの国語科の学習の様子と、めあて、振り返りの仕方について授業動画を見ながら紹介し合った。(写真5、6)



【写真5、6：他グループの授業について知る・考える機会】

<成果：○ 課題：△>

- 他のグループの生徒がどのような学習をしているのか学部職員全員で共通理解することができた。それによって「日常生活のこの場面で、このように声を掛けてみよう」など、学びを発揮できるような手立てを考えるきっかけとなった。
- 各グループのめあてと振り返りの在り方について相談したり、アドバイスをもらったりする機会となった。
- △めあて、振り返りなど改善後の様子も紹介し合う機会を設定できるとよい。

②研究授業の実施

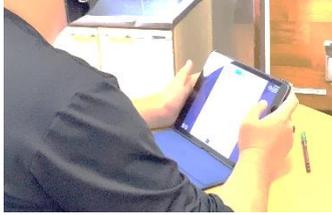
全校授業研究会に向け、10月に学部で事前授業研究会、事後研究会を行った。事前授業研究会、事後研究会では、以下の成果と課題があった（表3）。

◎成果	△課題
◎生徒が主体的に取り組む姿が見られた。 （取り上げるテーマ、繰り返しの学習によって） ◎感想を書く行事の内容とそのときの気持ちを思い出すために写真を提示することで、意見をたくさん出していた。	△行事の写真を見たときに生徒からたくさん出たよい発言がロイロノートのウェビング図に反映できていない。よい発言が消えてしまっていた。生徒が作成するのは難しい。 <u>&lt;→改善①展開の流れを変更&gt;</u>
◎学習の流れが分かる整った板書になっていた。	△めあての答えとなるまとめが不十分 「どうしたら理由が伝わるのか」を全員でおさえる必要がある。 <u>&lt;→改善②まとめを板書する&gt;</u>
◎ペアでの発表、感想カードの交換によって、相手に自分の気持ちや感想が伝わる喜びを感じていた。	△ペア以外の友達の発表を聞く機会がなかった。グループでの学びの機会が足りない。 <u>&lt;→改善③終末の流れの変更&gt;</u> △「相手に伝わったか」のポイントが ①「なぜなら」で理由を話したか ②大きな声で、ゆっくり話したかの2点で、2つの評価を生徒がしなくてはならなかった。振り返りが記入しづらそうだった。 <u>&lt;→改善④本時の目標を「なぜなら～から」で話すことに絞る&gt;</u>

【表3：事前授業研究会、事後研究会の成果と課題】

これを受け、次のように改善を行った。（図8、9）

<改善① 展開の流れの変更>

改善前		
① 感想を書く行事の様子を写真で振り返る（全員）	②ロイロノートのウェビング図を生徒が作成する（個別）	③自分で作成したウェビング図を見ながらロイロノートで文をつくる（個別）
		
△②：①での発言をウェビング図に反映することが難しかった。ウェビング図の作成に時間が掛かる。		
△③：ウェビング図、ワークシートの両方がiPadだと、2つを同時に見ることができない。		



**改善後**

①感想を書く行事の様子を写真で振り返る（全員）  
文をつくる



②生徒の発言を基にT2がウェビング図を作成する



③T2が作成したウェビングを参考に紙のワークシートを



T 2

○②：生徒が率直に感じたことを反映できる。文づくりに時間をかけることができる。  
○③：ワークシートを紙媒体にすることで、ロイロノートのウェビング図を見ながら理由を表す文をつくることができる

【図8：展開の流れの変更点】

<改善②>まとめの板書 <改善③>終末の流れの変更

**改善前**

①ペアで発表する（ペア）



②理由カードを記入し、交換する（ペア）

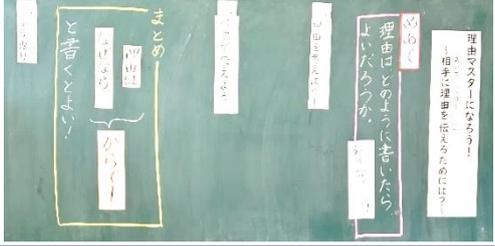


③振り返りをする（個別）



△ペアでない友達の見ることがない。  
4人グループでの学び合いの場が少ない。

改善後 振り返りの前にまとめを設定  
全員の文をモニターに映しながら教師が評価し、まとめを板書する（全員）



○グループでの学び合いができる。  
○まとめをすることによって振り返りを記入しやすくなる。

【図9：終末の流れの変更】

<改善④>本時の目標の絞り込み

改善前は①「なぜなら～からです」「理由は～からです」で文を組み立てる、②声の大きさや話す速さを意識して相手に伝える、の2つの本時の目標を設定していた。それによって生徒は2つの観点で振り返りをする必要があり、「なぜならを使うとよいことが分かった」と振り返りをする生徒、「大きい声で話すとよいことが分かった」と話し方について振り返りをする生徒に分かれてしまった。そのため、本時は①の「なぜなら～からです」「理由は～からです」で文を組み立てる目標に限定し、そのあとの小単元で②の話し方に触れることとした。そうすることで、本時は「なぜなら」などの理由を表す言葉を用いて文をつくることのできたかについて振り返りができるようにした。

<成果：○ 課題：△>



○まとめ場面で、生徒全員の文章を画面配信したことで、友達の書いた文を読むことができ、友達の文のよいところに気付くことにつながった。また、えんぴつツールで「なぜなら」「からです」など本時の重要な部分に印を付けることで、自分や友達の文章がめあてを達成しているのか、グループみんなで確認することができ。画面配信機能を活用することで、グループでの学び合い場面が増えた。また中学部では、ICTとアナログ媒体のバランスを検討した。表4に示されているものはICTではなく、ワークシートを用いたものとその理由である(表4)。どれも一度ICT(iPad)を活用したが、iPadを使用することで生徒の活動や思考を妨げていたことや、紙媒体の方が見返すことができるというICTの課題点や紙媒体のよさを確認した。

ワークシート	ロイロノートのウェビング図を見ながら文をつくるため
振り返りシート	ファイリングしていつでも見返すことができるため
理由カード	友達に書いてもらい、振り返りシートに貼る。「相手に伝わった」と実感しながら振り返りを記入することができるため

【表4：アナログ媒体を用いることにしたものとその理由】

<成果：○ 課題：△>

○活動内容やねらい、生徒の実態を踏まえて、ICTとアナログ媒体とのバランスを検討することができた。それによって、効果的なICTの活用につながった。

△これまで授業でICTを積極的に活用してきたことによって、中学部の大半の生徒が、一人でICT(主にiPad)を使用することができるようになった。今回の研究授業やそれ以外の学習では、授業者がICTを使用する場面をすべて決定した上で授業を行っている。だが、今後生徒自身が学習場面や活動内容に応じて、自分にとってICTとアナログ媒体のどちらを使うとよいか考え、選択する場面を設けることで、生徒の主体的な学びや、自己理解につなげていくことができると考える。

## 8 成果と課題のまとめ

### 成 果

- ・指導内容確認表を用いて全職員で丁寧に実態把握することができた。それによって、国語科の単元の立案、めあての表現の工夫、段階的な小単元の設定、T Tの役割分担につながった。
- ・単元題材一覧表を作成し、国語科と他教科との関連を検討する機会を定期的に設けたことで、国語科全グループの学びを発揮できる単元を学部職員で立案することができた。また、職員それぞれの授業や日常生活の中で、国語科の学びを発揮できる言葉掛けや支援を検討することもできた。
- ・単元題材構想シートを用いて、単元の検討を重ね、単元の目標、小単元の構成、扱う教材を学部職員で十分に検討、改善することができた。
- ・一単位時間の授業づくりでは、主にめあてと振り返りの在り方について検討を重ねた。めあては生徒の実態をふまえた分量や表現にすることで生徒が授業のゴールを理解することができた。生徒が学びを実感するためには振り返りの在り方が重要であり、まとめの時間を設けたり、教師と対話をしたりすることで本時の学びが分かり、分かったこと、難しかったことを振り返りできるようになってきた。また、学部職員で検討を重ねてきたことで、それぞれの職員が自身の授業のめあてと振り返りの在り方を検討することにつながった。
- ・I C Tとアナログ媒体それぞれのよさを全職員で確認し、学習活動のねらいに沿って、それらのバランスや効果的な活用を検討し続けることができた。

### 課 題

- ・指導内容確認表を、年度当初の実態把握でのみ活用した。年度末の生徒の変容を確認する際にも活用することで、具体的に1年間の国語科での評価をすることができる。また、来年度国語科を担当する職員が変わっても、生徒がどのような実態なのか、昨年度どのような学習をしてきたのか引き継ぎ、今年度の学びをつなげていくことが重要であるので、引き継ぎにも指導内容確認表を活用していきたい。
- ・生徒が学びを実感できるめあてと振り返りについては継続して検討が必要である。一単位時間のめあてと振り返りについては検討を重ねてきたが、毎時間同じような表現になってしまうことがあったため、学習内容に応じて発展性のあるめあてについて検討していきたい。
- ・教師がI C Tとアナログ媒体のどちらを用いるか決めている。生徒の主体性を高めるために、活動内容に合わせてI C Tとアナログ媒体のどちらを使うか生徒が選択する場面も設定していきたい。
- ・国語科の学習は生徒の自立活動と密接に関わっている。今回単元を立案するにあたって、生徒の自立活動の課題や目標を確認することがなかった。個別の支援計画や指導計画と関連付け、学びを生徒の自立につながる単元づくりを行っていきたい。

高等部

# 高等部研究について

## 1 研究主題

生徒が主体的に学び、その学びを実感する授業づくり（2年／2か年）

## 2 学部研究の重点

- ・ 学習内容の絞り込み
- ・ めあての文言と振り返りの改善
- ・ 効果的なICTの活用

## 3 重点の設定理由

昨年度は、生徒が主体的に学び、その学びを実感する授業づくりとして、国語科の単元づくり、一単位時間の構成の視覚化、伝え合うためのICT機器の活用に取り組んだ。「地域との絆プロジェクト」と関連させた単元・題材で構成したことにより、生徒自身が経験したことを説明したり、感想を発表したりする活動を積み重ねることができた。また、自分の意見を進んで話すことが難しい生徒が多いため、ロイロノートやフリーボードなどのICTを活用して自分の意見をまとめる、話し合う活動、グループやペアで話し合う対話的な場面を多く設定した。ICTを取り入れたことで話し合い活動が円滑に進む場面が増え、自分の意見に自信をもって発表する姿が見られた。しかし、授業のめあての提示方法や振り返りの改善や、毎回の授業で「何を学んだか」「何が身に付いたか」が分かるようなねらいや内容の絞り込みがさらに必要であった。また、ICT機器と板書とのバランスや他の教科での活用などを整理していく必要がある。

そこで昨年度までの成果と課題を受けて、学部研究の重点を上記の三点とした。生徒が何を学んだかが分かる授業のめあてと振り返り方法について検討し、提示方法や文言の改善を積み重ねることで、生徒の主体的な学びや学びの実感につなげることができると考える。また、国語科の授業において、実態を踏まえて学習内容の精選に努め、定期的に指導計画を修正することやICTの活用場面について検討することで、生徒が主体的に学び、自身の学びを実感する姿を引き出すことができると考え、重点を設定した。

## 4 研究仮説

国語科において身に付けたい力を明確にし、日常生活の中で起こりえる事柄を題材とする。語彙力の向上を目指し、本時と前時の学びをつなげる導入や、めあてを達成できる学習問題の設定、考えを整理できる振り返りの在り方を工夫しながら授業改善を積み重ねる。これらの実践を積み重ねることで、生徒が身近な友達との心地よいコミュニケーションや、状況に応じてやり取りする姿を引き出すことができ、卒業後の伝え合う力、表現する力につながるだろう。

## 5 研究内容・方法

### (1) 生徒が学びを実感できる単元づくり

- ① 生徒の丁寧な実態把握
  - ・ 学習指導要領に基づいた、複数の教師による実態把握と共有
  - ・ 生徒の実態の定期的な見直し
- ② 生徒が学びを生かすことができる単元の立案
  - ・ 年間を見通せる単元題材一覧表の作成
  - ・ 国語科と他の学習活動との効果的な関連の検討と改善
- ③ 単元の検討と改善の積み重ね
  - ・ 単元の目標や内容の検討と精選
  - ・ 授業で取り上げる題材や教材の検討、改善
  - ・ 単元改善の過程の可視化と共有

### (2) 生徒が主体的に学び、その学びを実感できる手立ての検討と実践

- ① 学びの実感に関する要点を絞った一単位時間の授業づくり

- ・ 学びの実感につながるめあてと学習問題、振り返りの検討
  - ・ 要点に沿った授業改善の積み重ねと有効な手立ての具体化
  - ・ 他の学習グループの授業について知る・考える機会の設定
- ② 研究授業の実施
- ・ 事前授業研究会の実施
- ③ ICTの効果的な活用と改善
- ・ 国語科の学習活動におけるICTの継続的な活用と改善
  - ・ 学部のiPad利用についてルールや活用場面の検討

## 6 高等部研究計画

月	主な内容
4月	<p><b>【研究日】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 高等部研究の方向性の確認</li> <li>・ ICTミニ研修（電子黒板、モニター）</li> </ul> <p><b>【単元・題材検討日①】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 前年度「地域との絆プロジェクト」の共有と今年度の「地域との絆プロジェクト」の方向性と各教科間のつながり</li> <li>・ 今年度の「地域との絆プロジェクト」で育てたい資質能力の検討</li> </ul>
5月	<p><b>【単元・題材検討日②】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 実態把握（指導内容確認表／熊本大学教育学部附属特別支援学校を基に）</li> <li>・ 国語科で大切にしたい点の検討</li> <li>・ 国語科の年間指導計画の検討</li> <li>・ 国語科と地域との絆プロジェクト、各教科間のつながりの検討</li> </ul> <p><b>【研究日】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 国語科で目指す「主体的に学ぶ姿」「学びを実感する姿」の検討①</li> <li>・ 学習指導要領各教科等編中学部・高等部国語科の目標の確認</li> <li>・ ICTミニ研修（クラウドについて）</li> </ul>
6月	<p><b>【研究日】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 国語科で目指す「主体的に学ぶ姿」「学びを実感する姿」の確認②</li> <li>・ 国語科で大切にしたいこと、「伝え合う力」について学習指導要領で確認</li> <li>・ 全校授業研究会に向けて（単元計画の検討①、スケジュールの検討）</li> <li>・ ICTミニ研修（Canvaについて）</li> </ul>
7月	<p><b>【研究日】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 5月に行った「指導内容確認表」と星本解説の「取り扱い内容表」の見比べ、活用題材の検討</li> <li>・ 国語科各グループの実施内容と、めあての提示と振り返り方法の共有</li> <li>・ 全校授業研究会に向けて（単元計画の検討②）</li> <li>・ ICTミニ研修（タブレットに入っているアプリについて質問コーナー）</li> </ul> <p><b>【単元・題材検討日③】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 国語科各グループの取組の振り返りと年間指導計画の見直し、共有</li> <li>・ 単元題材一覧表の見直し</li> <li>・ 対象グループの単元・題材構想の検討（指導内容表を用いて）</li> </ul> <p><b>【高等部教材展示会】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 国語科、数学科の教材展示</li> </ul>
8月	<p><b>【研究日】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 対象グループの単元・題材構想、指導計画の検討（単元構想シート、実態・課題整理シートを用いて）</li> <li>・ ICTミニ研修（ロイロノートのシンキングツールについて）</li> </ul> <p><b>【単元・題材検討日④】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 前期の「地域との絆プロジェクト」と各教科の取り組みの確認と共有</li> </ul>

9月	<p><b>【研究日】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・「高等部国語科で大切にしたいこと」の再検討</li> <li>・研究対象グループを中心とした「主体的に学ぶ姿」「学びを実感する姿」の再検討</li> <li>・ICTミニ研修（実物投影機について）</li> </ul>
10月	<p><b>【小学部全校授業研究会】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・小学部算数科全校授業研究会</li> </ul> <p><b>【研究日】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・小学部全校授業研究会の成果と課題の振り返り</li> <li>・全校授業研究会に向けて（指導案検討①）</li> <li>・授業を見合う会</li> <li>・ICTミニ研修（骨伝導イヤホンとボイスメモについて）</li> </ul> <p><b>【単元題材検討日⑤】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・事前授業研究会、事後研究会を受けて</li> </ul>
11月	<p><b>【研究日】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・事前授業に向けて教材や授業の流れの確認</li> <li>・事前授業研究会</li> </ul> <p><b>【中学部全校授業研究会】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・中学部国語科全校授業、研究会</li> </ul>
12月	<p><b>【研究日】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・中学部国語科全校授業研究会の成果と課題の振り返り</li> <li>・全校授業研究会に向けて（指導案検討②）</li> </ul> <p><b>【高等部全校授業研究会】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・高等部国語科全校授業提示、研究会</li> </ul>
1月	<p><b>【研究日】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・高等部全校授業研究会の成果と課題の振り返り</li> <li>・学部研究のまとめ（成果と課題）</li> </ul> <p><b>【単元・題材検討日⑤】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・全校縦割グループで実施</li> </ul>
2月	<p><b>【単元・題材検討日⑥】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・今年度の振り返り</li> </ul>
3月	<p><b>【研究日】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・次年度の研究に向けて</li> </ul>

## 7 研究の実際

### (1) 生徒が学びを実感できる単元づくり

#### ① 生徒の丁寧な実態把握

- ・ 学習指導要領に基づいた、複数の教師による実態把握と共有
- ・ 生徒の実態把握の定期的な見直し

学習指導要領の指導内容確認表（熊本大学教育学部附属特別支援学校）を基に、国語科の各グループ（A～Dグループ）で実態把握を行った。5月に1回目の実態把握を各グループ毎に行い、国語科の年間指導計画を作成する資料として役立てた。夏季休業中にもう一度、各グループ毎に指導内容確認表と年間指導計画の見直しを行った（図1）。

ア登場人物の行動や心情などについて、叙述を基に捉えること。  
イ段落相互の関係に着目しながら、考えとそれを支える理由や事例との関係などについて、叙述を基に捉えること。  
ウ登場人物の心情や情景について、場面と結び付けて具体的に想像すること。  
エ目的を意識して、中心となる語句を見付けて要約すること。  
オ文章を読んで理解したことに基づいて、感想や考えをもつこと。

○：ほぼできている  
～できている  
△：できる場合もあるが、  
定着していない

【図1：  
指導内容確認表を  
用いたAグループの  
実態把握 夏季休業版】

指導内容確認表に基づき実態把握を進める中で、日常的に生徒の不足している力と感じていた「身近な友達と心地よいコミュニケーションを図り、話し手の意図が正しく伝わる経験の積み重ねや、教師や目上の人に対し、敬語を中心とする丁寧な言葉遣いで話す姿」を目指す指導内容が必要であることを共有することができた。

#### <成果：○ 課題：△>

- 細やかに実態把握をすることにつながった。実態把握からどの段階の学習内容が良いか判断し、段階に合わせた星本の内容を吟味することにつながった。
- △→○になる（できるようになった）段階を増やすことは難しかったが、その段階の内容を深めることができた。
- △ 研究日で見直す時間を設定することで確認することができたが、何度も見直す時間を設定ことはできなかった。

- ・ 「主体的に学ぶ姿」、「学びを実感する姿」、国語科の指導において大切にしたいことの検討  
高等部国語科における、「主体的に学ぶ姿」、「学びを実感する姿」を検討、整理し（全校研究資料2）、全校授業研究会対象グループについては「主体的に学ぶ姿」、「学びを実感する姿」をさらに具体化した（高等部研究資料1）。また、その姿を目指し、国語科の指導において大切にしたいことを検討し、共通理解を図った（高等部研究資料2）。

#### <成果：○ 課題：△>

- 目指す具体的な姿を共有し、授業づくりを進めることができた。
- 国語科で大切にしたいことを検討、共通理解したことで、学部全体で方向性をそろえて授業づくりに取り組むことができた。

#### ② 生徒が学びを生かすことができる単元の立案

- ・ 年間を見通せる単元題材一覧表の作成
- ・ 国語科と他の学習活動との効果的な関連の検討と改善

4月に単元題材一覧表を作成し、扱う題材の内容の検討と目指したい姿を付箋（黄色）に記入した。5月に国語科を中心とした単元題材の内容を各グループ毎に付箋（ピンク）に記入し共有した。7月に単元題材一覧表と国語科の年間指導計画を照らし合わせ、今後の単元計画の修正や国語科で身に付けた力を発揮する場を検討した（青付箋で記入）。

今回Aグループの「伝える内容を明確に詳しく伝える」学習では、日常生活の中で話し手の意図

が正しく伝わらずにトラブルになり得る、ということが題材として取り上げた理由の一つとなっている。日常生活場面を中心とした学校生活全般に関わる場面が学びを發揮する場となること、また地域の人との関わりが多い「地域との絆プロジェクト」の場面で發揮されることが期待される。「地域との絆プロジェクト」では「絆カフェ・ショップ」として、地域の公共施設でコーヒーを中心とする飲食の販売・提供や作業学習製品の販売学習を定期的に行っている。「絆カフェ・ショップ」の12月の本番に向け、校内で模擬出店を行う中で、店員役とお客さん役を交互に行い、振り返りの中で成果や改善点を含む感想を発表した。友達の見意見を聞いて、嬉しい気持ちになったり、改善点を受け入れて本番までに準備をしたりする姿が見られた。また高等部全体として考えた際に、音楽や美術など他の教科において感想やイメージなど自分の考えを伝える場面の設定や、自分の考えの理由や根拠を話す場面の設定を行っている。

**<成果：○ 課題：△>**

- 研究対象教科の国語科だけではなく、他の教科との関連についても考えることができるツールであった。
- 一年の見通しをもつ、年度途中で見直す機会があることで、修正しながら単元を組み立てることができた。また、他のグループの学習内容を知る機会にもなり、参考になった。
- △他教科との関連を考えるよいツールである反面、関連させようとしすぎてしまう部分があった。

③単元の検討と改善の積み重ね

- ・単元改善の過程の可視化と共有

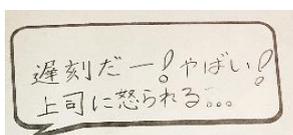
単元題材構想シート(高等部研究資料3)を用いて、学部職員全員で、指導計画や主体的な学び、学びの実感につなげるためにについて、検討・改善を積み重ねた。

ア 単元の内容や工夫について

Aグループの実態に応じ、「伝え合う力」「表現する力」を高めるための単元について検討を重ねてきた。

<取り上げた単元や題材①>

1枚の写真から情報を読み取って、状況に合う台詞を考える

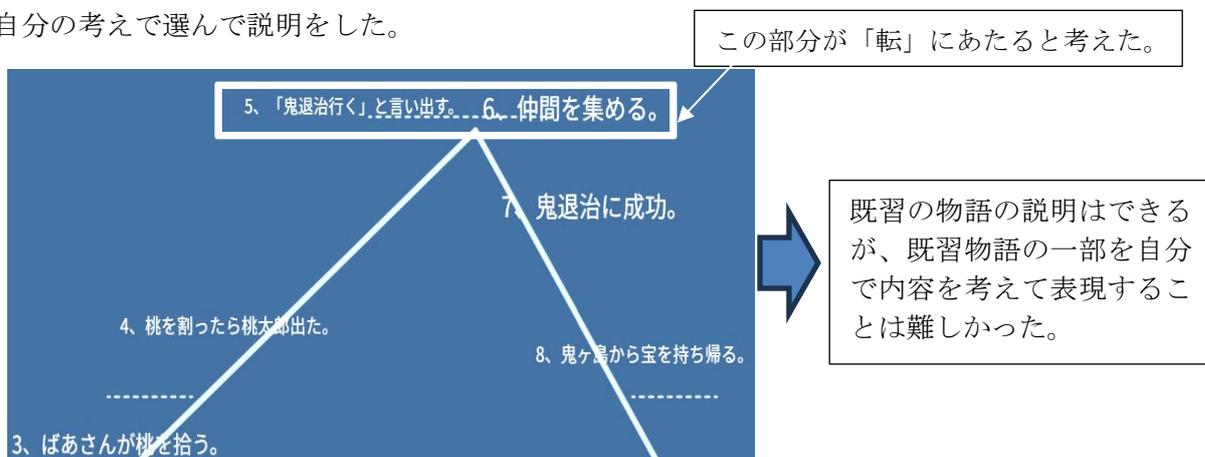


見た状況をまとめて伝える力や、伝える順番を意識して表現する力がついてきた。

→今後は1枚を複数枚にしたり、物語などを説明する、想像して書くことに挑戦することにした。

<取り上げた単元や題材②>

誰でも知っている昔話や童話、物語や4コマ漫画などのあらすじから、起承転結の「転」にあたる場面を自分の考えで選んで説明をした。



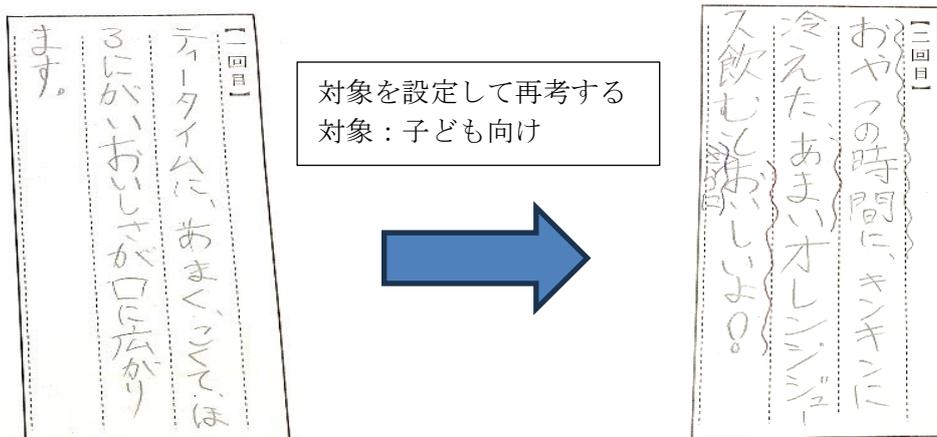
(ある生徒が「桃太郎」の話の「転」の場面を選んで表した画面の一部)

→伝えたい思いや考えはあるが、言葉や文章で正確に伝えることが難しい。まずは文章を詳しく伝えることに絞る。詳しく伝えるために、修飾語について単元を深めることとした。

<取り上げた単元や題材③>

商品のよさをお客さんに宣伝する際に、修飾語を使って詳しく説明をした。お客さんの対象を変えることで、伝えたい内容や文章表現を変えることにも挑戦した。

①例：オレンジジュースの宣伝文



→商品、様子、状況など、どの言葉を詳しくするか考え、対象に合わせて文章の内容や表現を工夫しようとする姿が見られた。

イ 扱う題材、教材

扱う題材や教材について根拠のあるものを取り上げて授業を行うために、1～5までの星本と星本の解説本について見合う時間を設定した。解説本を基に、どのように指導するか、題材のねらいは何かなどについて読み込むことができた。生徒の実態把握に活用した「指導内容一覧表」と星本解説の「取り扱い内容表」を照らし合わせ、グループ毎に教材、単元として扱うことができる内容があるか検討した。実際にグループ毎に星本を参考に学習内容を検討し、授業を行うことができた。

- Aグループ：☆☆☆☆☆ 「言葉のページ 修飾語」
- Bグループ：☆☆☆ 「文をかこう」
- Cグループ：☆☆☆☆ 「電話を使って伝えよう」
- Dグループ：☆ 「おーい」「くまさん くまさん」

ウ 指導計画

全校授業研究会で提示するAグループについて、指導計画を以下のように検討、改善した。

<指導計画案①（8月時点）>

単元・題材	主な内容	身に付けたい力
・写真シリーズ	4コマ漫画のようなイラストや写真の○コマ目のセリフを書く。	・多面的に情報を読み取る ・前後の関係性を読み取る ・物事を詳しく伝える
・言葉を深めるシリーズ	「かわいい」「おいしい」を修飾したり、似た意味の言葉に言い換えたりする。	・語彙力を向上する ・表現方法を知る、増やす、活用する
・続・写真シリーズ	1枚の写真から状況を読み取り、その前後を想像して順序立ったストーリーをつくる。	・伝わりやすい言葉を選ぶ ・言葉の表現を工夫する ・相手や目的を意識して構成を考える

検討1：授業を進める中で、複数枚の写真を取り上げたり、その前後を考えたりする学習は、ねらいを焦点化できず、難しかった。

検討2：言葉を深めるシリーズの似た意味の言葉に言い換える学習は、継続して短時間で取り組むことが効果的であると感じた。修飾することについて深めた単元にしたい。



<指導計画案②（10月時点）>

単元・題材	主な内容	身に付けたい力
・写真から読み取る	1枚の写真から状況を読み取り、セリフを書く。	・多面的に情報を読み取る ・前後の関係性を考える ・読み取った情報を伝える
・言葉を飾ろう	「泣く」「明るい」などを修飾したり、言い換えたりする。	・語彙力を向上する ・表現方法を知る、増やす、活用する
・文章で伝えよう	課題の例文について詳しく伝わるように文章を考える。	・伝わりやすい言葉を選ぶ ・言葉の表現を工夫する ・相手への伝わりやすさを意識し、詳しく表現する
・続・文章で伝えよう	課題の例文についてさらに詳しく伝わるように文章を考える。	・相手や目的に合わせて伝えたい内容を明確にする ・相手への伝わりやすさを意識し、自分の言葉で話したり文章にして伝えたりする
・読んで伝えよう	作業学習製品の宣伝文を考え、発表をする。	・伝える相手や内容を明確にし、適切な話し方をする ・言葉を選んで話したり、話し方を工夫したりする

<成果：○ 課題：△>

○指導の根拠となる星本を参考に単元の立案に取り組んだことで、自信をもって授業を行うことができた。また、指導内容表の段階と照らし合わせ、☆本の内容を取り上げ、できるようになったかどうか確認することができた。

**(2) 生徒が主体的に学び、その学びを実感できる手立ての検討と実践**

①学びの実感に関する要点を絞った一単位時間の授業づくり

- ・単元の目標、振り返りの検討

めあての文言や振り返り方法について、各グループの方法を紹介し合った（表1）。

Aグループでは、「～よいか？」という疑問形でめあての提示を続けていくことを確認した。

グループ	めあて	振り返り
A	行動目標ではなく、「～よいか？」の疑問形で提示する。	時間の関係で数名だが、生徒の言葉でまとめるようにする。
B	「主語・述語・助詞」のように取り組むことが分かる、「正しく」のように評価の観点が見えるキーワードをめあての文言にする。	個で振り返りをする。ロイロノートを活用し、画面を映し出して、グループの友達と共有をする。
C	行動目標「～しよう」で提示する。	iPadで評価に関わる場面を動画撮影。動画は、即時評価や振り返り時に活用する。
D	「～（活動内容）で○点をめざそう」と示す。 ※生徒の実態から、課題の達成度を点数で表している	全体、個別の学習で個別に何点とれたか確認する。学習を進める中で点数を獲得したときに即時評価することで、「できた」実感を伴うことができるようにする。

【表1 各グループのめあてと振り返り方法について】

- ・小学部、中学部の全校授業研究会を受け、めあてを深めるための「学習問題」の提示をする。学習問題が、まとめの際の評価の観点となるように設定することを共有した。
- ・有効な手立ての具体化

ア 前時の振り返り（前時の板書やワークシートの提示）でのICT活用

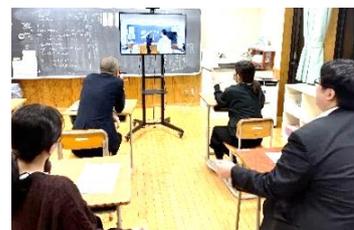
ICTの活用場面について検討を重ねてきた。導入時に前時の振り返りを行うことで、前時の学びを本時に生かそうとする姿が見られるようになってきた。

イ 「一人で考える→友達と共有する→再考する」学習活動のパターン化

自分の考えが出てこない、自信がない生徒が多い中で、友達と考えを共有する時間があることで、友達が似た表現や言葉を使っていることに気が付いて自信をもったり、友達の考えを聞いて自分の考えるヒントをもらったりする活動の設定をすることができた。再び、再考する時間を設けることで、考えを深めることにつなげることができている。

・他のグループの授業について知る・考える機会の設定

B～Dグループの国語科の学習の様子とめあてと振り返りの仕方について、授業動画や板書写真を見ながら紹介し合った。他のグループの生徒が学習に向かう姿勢やICTの活用場面、教材の工夫について知ることができた。



【他のグループの授業を見合う会の写真】

<成果：○ 課題：△>

○振り返りを予想しためあての検討ができた。

△振り返りの方法として、他者評価を取り入れたが、生徒に伝わる、分かる評価方法とは何か見付けることが難しかった。

②研究授業の実施

全校授業研究会に向け、11月に学部で事前授業研究会を行った。事前授業研究会では、以下の成果と課題があった（表2）。

◎成果	△課題
<p>&lt;導入&gt;</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>前時の振り返りの板書やワークシートをモニターに提示することで、生徒が思い出している姿が見られた。</li> </ul> <p>&lt;めあて・学習問題&gt;</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 5px 0;"> <p>めあて：相手に伝わりやすい文章表現とは？</p> </div> <ul style="list-style-type: none"> <li>学習問題はめあてを深める手立てとして有効であった。</li> <li>生徒全員が知っている飲み物を題材にあげたことで、考えやすかった。</li> </ul> <p>&lt;展開&gt;</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>自分で考える→友達と意見交換をする→再考する活動を設定していた。再考して追記する生徒の姿がよい。</li> <li>考えを膨らませて、詳しく、長く文章を書くことができていた。</li> </ul> <p>&lt;まとめ&gt;</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>評価の観点を3つに絞っていた。</li> </ul> <p>&lt;振り返り&gt;</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>評価の観点が分かって自分からワークシートに記入している生徒の様子が見られた。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>課題の説明で提示した絵日記のイラストが物語のように書く印象を与えてしまったかもしれない。</li> <li>めあての「相手」とは、どのような対象か。</li> </ul> <p>&lt;改善①&gt;</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>めあての文言の再検討が必要である。</li> <li>物語のようになってしまった。</li> </ul> <ul style="list-style-type: none"> <li>3つの観点に沿って代表生徒を選ぶことができていたか。ねらいをもっと明確にする必要がある。</li> <li>生徒が書いた文章を板書することに時間が掛かっていた。写真で写すとよい。&lt;改善②&gt;</li> <li>まとめを受け、自分の書いたものを自己評価する時間の設定があるとよい。自分の書いた文章が3つの観点に沿っていたかの確認の時間が必要である。&lt;改善③&gt;</li> <li>肯定的な表現方法で文章を書くことを追加条件に入れたい。&lt;改善①&gt;</li> </ul>

【表2 事前授業研究会、事後研究会の成果と課題】

これを受け、次のように改善を行った。

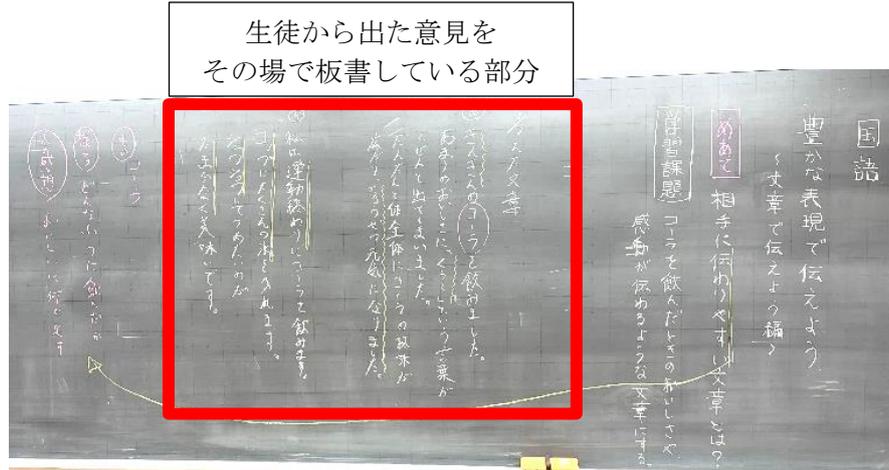
<改善① 「相手」の対象の明確化、単元構成の見直し>

めあてに掲げた「相手」について検討した。これまでは、身近な友達に伝わるように書くことを想定していた。事前研究授業の中で、逆接の接続詞を使って否定的な文章表現で書いた生徒がいたことから、肯定的な表現で伝える力をさらに育てたいと考えた。「地域との絆プロジェクト」の絆カフェ・ショップでは、お客様を対象にPR活動や接客を行っている。この活動において、肯定的に表現する力が大切であると考え、今回の単元に作業学習製品のPRを考える小単元の追加した。他教科との関連を見直したことで、国語科で身に付けた力を発揮する場の設定が明確になった。

<改善② まとめに関わる部分を板書ではなく、ワークシートを映しだし、その場で共有する>

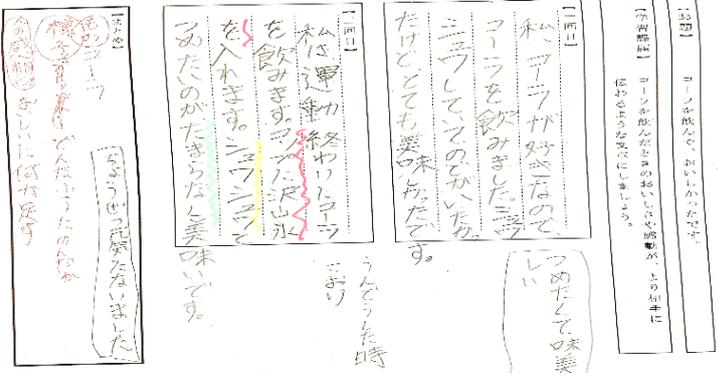
**改善前**

生徒から出た意見を  
その場で板書している部分



・枠線部分をT2が板書していた。T2板書後、T1が3つの評価の観点に沿って、線を引いて確認した。

**改善後**



・写真を撮り、モニターに映した。本時の評価の観点ごとに、色を変えて線を引いてまとめた。板書を書き終えるまでの待ち時間が減り、すぐに共有できた。ICTの有効な活用にもつながった。



<改善③ まとめの評価の観点を考え直し、自己評価する時間の設定>

**改善前**

課題文：「〇〇を飲んでおいしかったです」

①      ②      ③

<まとめ、振り返りの観点>

・「①もの、②様子、③味のどこを詳しく説明する文章を書くことができたか。」についてまとめをした。

→全員分の文章について紹介しようとする時間がかり、文章紹介に留まってしまった。友達の文章を知ることができるが、自分のつくった文を自己評価する時間が十分に取れなかった。

## 改善後

課題文：「〇〇がおいしいです」

① ②

<まとめ、振り返りの観点>

・「①名詞 ②動詞 を詳しく説明する文章を書くことができたか。」についてまとめた。  
→代表生徒の文章紹介を受け、自分の書いた文章は①、②のどこを詳しく説明して書いていたか自己評価をすることにした。まとめの観点に沿って、色を変えてワークシートの文に線を引く姿が見られた。

### ③ ICTの効果的な活用と改善

授業の中で効果的にICTを活用するために、活用場面について検討を重ねてきた。考えを深める場面の活用では、一台のタブレットに交代して考えを書き込んだり、一人一人がロイロノートやポストイットなどのアプリを活用して考えを記入したりすることに挑戦した。ICTを取り入れることは、意欲的に取り組む姿を引き出すための有効なツールにはなっているが、使い方に慣れてくることで、生徒の意欲を持続させることが難しくなってきたこと、振り返って見返す際にタブレット上では見比べにくいなど、継続的な活用には至らなかった。活用場面について検討した結果、「研究授業の実施」の改善②で前述したとおり、まとめに関わる場面で、記入したワークシートを映し出して共有することが有効であった。

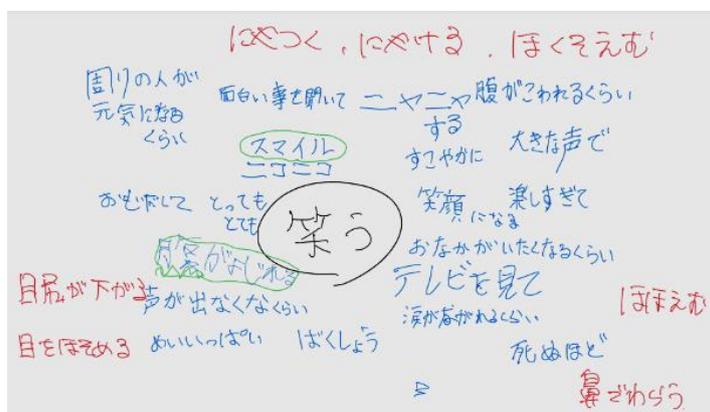
#### ・導入時の活用

前時の振り返りをモニターに提示することで、頷きながらモニターを見たり、ファイルに綴ったプリントを探して見たりする様子が見られ、本時への学びにつなげることができた。



【授業導入時にモニターを活用している場面】

・「笑う」というお題に沿って生徒それぞれが言葉を言い換えたり、「笑う」の言葉の前に修飾語を加えたりしているフリーボードを活用した学習により、思考を深め、友達と共有することができた。



【「笑う」を題材とした、実際のフリーボード画面】

## <成果：○ 課題：△>

- モニターに映し出して情報共有をすることは有効であった。
- 意欲的に授業に取り組んだり、ロイロノートを使い、振り返りを自分の言葉で打ち込んだりなどの活用につなげることができた。
- △授業者のスキルの違いで、授業の中でICT活用する方法や量は異なってくる。
- △iPadの中に蓄積されていくが、手に残らないという不便さもあった。
- △自立活動の視点では、有効な活用ができたが、教科的視点で、どのように活用すべきか課題が残った。

## 8 成果と課題のまとめ

### 成果

- ・学習指導要領の指導内容表を活用し、身に付けたい力を絞って単元づくりを進めた。研究対象グループでは単元構想シートを活用して指導計画の検討を重ねたことで、「修飾語」の単元を深めて指導につなげることができた。
- ・国語科で大切にしたいこととした「伝え合う力」「表現する力」は、主に生活単元学習の中で発揮する場面を設定することができた。役割分担を決める際に、2つのグループ内でどちらの活動を行うか、話し合い活動を行った。グループ内の意見をまとめるために、「～が得意だから」、「～の方がみんなのできるから」と友達を気遣う表現を選んで話す姿が見られるようになってきた。
- ・めあての文言と振り返り方法について検討を重ねてきた。めあてについては、「～か？」と疑問形で提示することや、評価の観点に分かるキーワードを入れてめあてとすることに取り組むことができた。めあてを詳しくする「学習課題」の設定にも取り組み、学習課題がまとめの際の評価の振り返りとなるように設定することを共有して授業を行った。
- ・本時の導入において、前時の振り返りとしてのワークシートや板書をモニターに提示することで、前時の学びを本時に生かそうとする生徒の姿を引き出すことができた。また、ロイロノートを活用して個々で振り返りをし、全体で共有することも有効であった。

### 課題

- ・指導の根拠となる星本を参考に単元の立案をすることができたが、指導の根拠となるものを増やすことができるように、小・中学校の教科書や指導書などを見る、参考にすることにも挑戦したい。
- ・めあての文言や振り返り方法について検討を重ねてきたが、めあてについては、引き続き、生徒が本時のねらいが分かるような具体的で明瞭な表現を検討していきたい。振り返りについては、自己評価や他者評価を取り入れながら、生徒が分かったかどうかの確認までできるような振り返り方法についても検討していきたい。
- ・授業のまとめや振り返りの中で、生徒に質問をしたり、生徒の言葉で表現したりすることで、分かっているかどうかの評価や、学びの実感を確認する機会を設定していきたい。また、「伝え合う力」を育むために、他の教科や合わせた指導の中で場を設定してきた。実際の経験を伴う中で語彙力を高めることができるように、継続して繰り返しの場を設定していきたい。

## 《研究同人》

校 長	伊藤 登美子	教 諭	岡田 七海
副 校 長	福士 智子	教 諭	伊藤 千聡
教 諭	佐藤 和春	教 諭	東海林紗季子
教 諭	藤田 泰幸	教 諭	森井 彩椰
教 諭	藤本 博明	教 諭	千葉 璃子
教 諭	加藤 弘子	教 諭	渡邊 芽生
教 諭	伊藤 美幸	教 諭	齋藤 美海
教 諭	畠山 智子	養護教諭	山木 朋子
教 諭	成田 高子	実習助手	布田 毅
教 諭	港 拓哉	実習助手	須藤 義樹
教 諭	畠山 純	臨時講師	佐藤 明子
教 諭	畠山 晃菜	臨時講師	佐々木有子
教 諭	大山南 視子	臨時講師	澤田 千夏
教 諭	伊藤 綾華	臨時講師	目黒 洋一
教 諭	竹田 泰生	臨時講師	小沼 后子
教 諭	豊田 里沙	臨時講師	佐々木捷吾
教 諭	佐々木 恭兵	非常勤	佐々木比呂子
教 諭	吉田 翔一		

### 令和6年度 研究紀要「ふきのとう」

発行年月 令和7年3月

編集発行 秋田県立比内支援学校たかのす校

〒018-3452 秋田県北秋田市七日市字家向49の内

TEL 0186-66-2128

FAX 0186-60-2102

E-mail [takanosu-s@akita-pref.ed.jp](mailto:takanosu-s@akita-pref.ed.jp)